
永久の想い

兎羽

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久の想い

【Nコード】

N8566C

【作者名】

兔羽

【あらすじ】

朝目覚めると、涙が頬を伝っていた。前世の記憶をもつ少年「古賀秀秋」は、毎日のように見る前世の記憶にウンザリしていた。夢だけだと思っていたのに、現代にまで現れて――…？

プロローグ（前書き）

B Lが入るので、嫌いなかたは読まないでください m (m

プロローグ

風が戸を叩く――…

キン、と張りつめたような冷気が床を冷やして、裸足のまま座っていた男の体を容赦なく冷やしていく。男は、酔いを冷ますために離れの倉まで来たのだが、あまりの寒さに体は震えが止まらない有り様だった。仕方がないので、体温を取り戻すべく、再び男は盃に口をつけていた。

何十メートルと離れた本家からは、同胞たちの愉快的笑い声や唄が絶え間なく聞こえてきていた。

きっと向こうでは、騒がしくしているのだろう…。
そう、思った時だった――…。

――リン、

戸が揺れる音に混じり、聞き慣れた鈴の音を、男の耳は捕えた。

月明かりで障子には、影となって竹の笹が写し出されている。その影に混じり、一つの人影もが写し出されている。
それを見つけた男は、嬉しそうに微笑した。

「いるんだろう？ 空也…」

障子の向こうにいるであろう、その人物に男は話しかけた。

すぐに返事をする様子はない。

きっと、入っていくべきかどうかを迷っているのだろう。その影は

バツの悪そうに頭をかいていた。
意を決したか、影は障子に手をかけて音もなく、それをスライドさせた。

月明かりに照らされた人物が、男の目にうつる。

黒髪を後頭部より少し上で一つに結び、小さい体に似合わない刀を腰に下げている。

武士の間では【時守の空也】と広く知られている少年だった。

「向こうで飲んでたんじゃないのか？」

本家のある方を指差し、男は空也に問いた。

空也はというと、あからさまにウンザリしたような表情をつくり、ドカツ、と男の隣に腰を下ろした。

「あつちはづるさすぎ…」

はあ…、と溜め息をついているところを見ると余程絡まれたのだらう。

仕方がないことだ。

どんなに強い実力の持ち主だろうと、所詮１６のまだ若さだ。さらには、１６にも見えない童顔、背丈と見れば、空也を子供のように扱う同胞は少なくなかった。

男は空也の横顔を見つめた。

艶のある黒髪が隙間風になびき、白い肌を柔らかく叩く。大きい瞳はまさに漆黒。その眼に睨まれれば、仲のいい男でさえ動けなくなるほど、まっすぐに綺麗な目をしていた。

無論、睨まれたことなどないが。

軽装備に身を包んでいる。その姿は戦でしか見ることが出来る空也の特攻服姿だ。

明日に控えた戦のため、男と空也を含む武士たちがこうして集まっていた。

「いよいよ明日、か…」

男は独り言のように呟いた。

それを聞いた空也は、からかうような口調で聞いた。

「【先駆の秀前】ともあろうお方が、戦前に随分と弱気だなあ。もしかして、怖がついたのか？」

ニヤリ、と右の口端をつりあげる、意地の悪い笑顔が、秀前の顔をのぞきこんでくる。

秀前は目をそらすように顔を背けると、苦笑いを浮かべた。

「ハハ、まさか。違うよ」

フーン、と興味無さそうに空也は秀前の盃を奪って、酒を口に流し込んでいく。

そんな空也を見つめながら、秀前は思った。

（やつぱ…言えないよなあ……）

空也がいなくなるのが怖い、なんて…。

言えば空也は怒るだろう。

俺はそんな弱くない！！と…。

しかし、秀前は今回の戦に嫌な予感を抱いていた。
それは何の根拠もない予感なのだろうけど、あってもおかしくない。
そんな予感だ。

なぜなら、つい3日前にも、秀前たちは大きな戦を終わらせたばかりだった。勝敗はいわずとも、勝ちを拾った。
しかし、余裕があったわけではない。
その戦で何人もの仲間を失った。
いくつもの武器をへし折られた。

それらはたった3日間で修復できるようなものではない。

だから、今回の戦はいつもより武士の人数も武器の数も少ない。
相手は、今まで何回も引き分けを繰り返してきた、なかなかの相手だ。

「……………」

嫌だ。

空也がいなくなるのだけは、嫌だ。

秀前にとって空也は幼い頃から憧れの人だった。
どんなに年や体格が違っていても、何時だって空也は弱音など吐かずに向かっていていた。

そして、秀前に本物の強さというものを教えてくれた。
何時だって、空也を見て育ってきた。

そんな憧れはいつしか、愛しさに変わっていた。

——守りたい。

その小さな少年を守りたかった。

秀前が目指す強さの向こうには、いつも空也がいた。

空也を守るため、そのためだけに、ここまで強くなった。

なのに…なんでだ？

弱気な自分。

守れる自信がない。

強くなったのに。

ただ、空也を守るためだけに…。

「勝つよ」

空也が言った。

「え…？」

「絶対に勝つ」

真っ直ぐと前を見据えて、ハッキリと言い切った。

まるでその目には、明日の戦績が見えているかのように——…。

その表情はいつもとは違う、子供っぽい空也とは違う、頼りがいの

ある青年の顔付きになっていた。

そんな表情を秀前は微笑ましく見つめていた…。

「だ〜いじょうぶだって！！だって俺がいるんだよ？」

しかし、そんな表情も一瞬でいつもの子供らしい表情に変わり、明るい口調に戻った。

そんな空也に、秀前はもう笑うしかなかった。

「あ〜！！その顔は信じてないな？絶対ったら絶対なんだぞ！！」

「わかってるよ。俺が空也を疑うわけないだろ？」

頬を膨らましている空也の頬を軽くつねり、微笑んで見せる。

子供扱いするな！！と言われるのを承知の行動だったが、空也の反応は秀前の思っていたのとは違っていた。

「つつ〜！！！！？」

顔を真っ赤にさせて、一瞬で後退して秀前から距離をとった。
よく分からない空也の行動に、秀前は首を傾げる。

「…どうした？」

「どうした…って…。だってお前が…あんまり素直だった、から…
…」

その口調はだんだんと弱くなっていく。しかし、口調は弱くなっていくにつれて空也の顔の朱みは増していった。

「???」

「だって…俺……」

うつむく空也。

首を傾げる秀前。

「俺、秀前が…す、す…」

「空也、秀前!!のんでるかぁ?」

空也の声をかき消すかのような、野太い声が部屋に響き渡った。
ほぼ同時に二人は振り返ると、そこには、本家の方で飲んでいたはずの同胞たちが倉に侵入してきていた。

「なぐに二人して辛気臭く飲んでんだよ。俺たちも混ぜろ」

完全にできあがっていた。

あつという間に倉は人でいっぱいになり、騒がしくなった。
秀前も空也も同胞たちにつかまり、しぶしぶと仲間と盃を酌み交すしかなかった。

(…ま、いっか)

二人の青年の複雑な想いを残したまま、夜は更けていった…。

翌朝――…

深夜に繰り広げられた戦は、日が上るとともに終わった。

乱戦ともいえる戦いで、戦場となったそこは、多くの屍や折れた刀などが落ちている。

異臭が立ち込めるそこは、酸化した血で茶色く染められていた。

そんな中、一人の武士が屍の中から立ち上がる。

まるで何かに取り憑かれたかのように虚ろな目、おぼつかない足取りで、彼は何かに導かれるかのように歩きだした。

「……や…くう、や……」

小さく開かれたその口から漏れたかすれた声は、戦場を駆け抜ける風に一就されてしまう。

それでも彼は、その名を呟きながら戦場を歩いた。

彼は大きな岩の前に立つと、足から力が抜けたかのように、その場に膝をつく。

その岩に力尽きた体を預けていたのは、小柄な少年だった。

漆黒のその瞳は見開かれたまま。

「あ…ああ……」

彼は少年を抱き締めた。

いつもなら、抱き締めれば暖かく、心を和ませてくれていたその体も今では、冷たい感触しか感じる事ができない。

いつもなら、抱き締めれば照れたように腕の中で暴れていたのに、今では自己意思すら持たぬ屍となっていた。

「くっ、や……」

彼のおえつだけが、戦場に聞こえる。

「くっや…ごめっ……ごめん……」

それは何の謝罪か…。

ただ、彼の頭の中には、笑っている少年と、最期に聞いた声だけがぐるぐると駆け回っていた。

『秀前…っ!!』

手を伸ばし、助けを求めた必死な声。

初めて少年が、彼に助けを求めた瞬間だった。

「ごめ、ん…空也……守れなくて、ごめんな……」

彼は少年の亡骸を胸に、永遠の眠りについたのだった――…。

目覚め

目が覚めると頬が濡れていた。背中は寝汗のせいか、微かに重く感じる。

ハッ、として無理矢理に夢から引きずり出されたような妙な感覚。冷たい何かが背筋を這うような感じが気持ち悪い。

毎日のように見ているあの夢はやっぱり自分の前世なんだろうか、と思うこともあるが、そんな非科学的なことを納得してしまうほど、俺はロマンチストではない。しかし、夢で見る背景や景色を見たことがあると思うのは確かなことだった。

現世の俺の名前が秀秋。

そして前世での名前が秀前？

「ハッ、出来すぎだろ…」

そんなことを思いながら、秀秋はベッドから起き上がると、気持ち悪く背中に張り付いていたシャツを脱ぎ捨てた。

自室を出て、寝癖を適当に手櫛でなおしながら洗面所へと向かった。

秀秋の朝は規則的だ。

シャワーを浴びて、まだ眠気の覚めない頭を叩き起こす。そして制服に着替えてリビングへと向かった。

一人暮らしなので、朝食も全て自己管理だ。

キッチンに立ち、ブラックではないコーヒーを片手に適当に朝食をつくっていく。

朝食を食べ終われば、テレビを見ながら身支度をすましてソファでくつろぐ。

朝には余裕があるので、朝のニュースが終わるとともに、秀秋は席を立った。

そして、彼の不規則的な生活はここから始まる。

全ての施錠を確認し、家を出る。

ガチャリ、と鈍い金属音のような音とともに、頭に響くような声が秀秋の耳を筒抜けた。

「ヒデにい！！！！！！」

まさに、近所迷惑なんてミジンコほどにも考えていないような音量だ。

キーン、とまだ名残を残す耳を塞ぎながら秀秋は辺りを見渡した。しかし、声主と思われる人物は見当たらずしばらく探していると視界の右端の方にピョンピョンと揺れている黒い物体を確認した。少しだけ視線をずらしてみると、秀秋の口からは

「やっぱり…」という呟きがもれた。

「空也…じゃねえ。空…」

そこにいたのは、まだ直しきれていない黒髪をピョンピョンと立たせている小柄な少年だった。

嫌そうな表情で空という少年を見ていると、少し頬を膨らませて「なんだよー」と不満そうな声が少年の口から発せられた。

「朝からこんなに可愛い弟様の顔が見られるなんて、ヒデは幸せものなんだぞ〜？」

…こういう意地の悪そうな笑い方は空也にそっくり…というより、空也そのものだ。

整った小さい顔が、緩むようにほころぶ。

たしか秀前はこの笑みを見ただけで幸せそうに微笑んでいたっけ？しかし、過去は過去。今は今。未来は未来！！ということで、俺は幸せな気分になるどころか、朝っぱらから空の幸せそうな笑みを見て不機嫌になった。

ゴツッ！！

「つて~~~~…！！何すんだよ！！」

涙目になりながら、訴えかけてくる空に対して秀前は開き直ったかのように、言い返した。

「うるさい！！お前があまりにも空也の可愛さに劣るから」

「はあ？ワケわかんねえ。空也って誰だよ…」

ブツブツと文句を言いながら、空は秀秋の前を歩いた。

（かわいくねー…）

秀前も気の毒だ。

来世で運命（？）的に空也（の生まれ変わり）と出会えたというのに、その空也は男で（元も男だが）さらに兄弟なのだ（つまり手出したら犯罪）。

せめて女の子だったら可愛かっただろうに…（空也女顔だから）。とりあえず秀前が一番ついていなかったのは、転生したのが俺だつてことだな。残念ながら俺は秀前みたいに純粹でもなければ、ホモ

でもないし、こんな可愛くない弟に手を出す気もさらさらない。

「何だよ……」

視線に気付いた空が、まだ根に持っているのか不機嫌気味に振り返った。その仕草は確かに男でも可愛いと思ってしまうような可愛さだ。

「ジロジロ見んなよなー」

「馬鹿が。自惚れんな」

…やっぱムカつく。

こんなたわいもない互いの悪口を言い合っているが、なんだかんだと仲が良い。そうでもなければ、兄弟仲良く登校なんて有り得ないはずだった。

こんな憎らしいほど可愛くなくても、やはり弟なのだ。

「ヒデちゃん!!空!!」

「「?」「」」

突如、後ろから名前を呼ばれて、ほぼ二人同時に振り返った。そこには息をきらせながら走ってくる制服姿の少女がいた。

「もつつ、置いてくなんて酷いよ……」

「司が寝坊するからだろう？」

「う…そーだけどー…」

そんな空と司のやりとりを傍観者気取りで見ていたが、途中時計に目をやり、先を促した。

「おはよう、ヒデちゃん」

「はよ…」

真正面きって挨拶されるとなんだか照れてしまうのは俺だけなんだろうか？

照れる、のとは違う気がするが、照れ臭い。

属にいう俺は不良だった。

挨拶されるなんて慣れてないし、ましてや、するなんて、仲の良いアイツラぐらいだ。

「ハッ、残念だったな秀前。俺は今時ラブコメなんて期待してねえんだよ。ま、運があつたら来世で女に生まれ変わって、空也とラブライフを送るんだな。だってどう見たってオマエが受けん！！！！？」

…頭に感じる鈍い痛み。

じわりじわりと広がって、俺の怒りメーターを徐々にふやしていく。くるり、と後ろを振り返ると、なにやら鞆を掲げた空がいた。

「そーらー？」

「あ…いや、なんかね？独り言ブツブツ呟きはじめて、さらに勘だけど、ヤバイ発言しそくないきおいだったから、ね？とりあえず…」

殴っておきました、てか？ニツコリ微笑む空に、怒る気力もなくして、仕方なく再び歩き出した。

ハタからみると、俺たちつてどう見えてんだろ？
仲のいい友達？

とりあえず、兄弟には見えてはないだろう。

秀秋、空、司の3人は、古賀の姓をもつ3つ子だった。
しかも、本人は気付いてないが、空はかなりのブラコン&シスコン。

「なあ、ヒデにい。今日さ、母さんたち仕事でいないんだよ」

……だから？

そこで率直に聞き返すほど、俺は馬鹿じゃない。

空が実家の話を持ちかけたということは、必ずと言っていいほど、俺に火の粉がふりかかる合図みたいなモノだった。
きつと、『だから泊まっていい？』的な言葉が続くハズだ。

「だから…今日泊まってる？」

「断る！！！」

秀明は、あらかじめ用意していたセリフを容赦なくいい放った。

「なんでだよケチ！！」

「なんとも言えはいい。母さんたちがいなくても家事ぐらいこな

せるくせに甘えやがって。俺がバイトして独り暮らし始めたのは、自由が欲しかったの！！なのに、お前らがいると、自由も糞もねえんだよ」

秀秋は、言うだけ言うと、校舎へ消えていった。

その後ろ姿を見つめていたのは、通称【ブラコン】兄弟。
何かを企んでいるような黒い笑みで、そこにたたずんでいた。

つながらない記憶

「秀前、覚悟オッ！っ！！」

春の午後――…。

桜の花びらが舞い散る桜の木の下、秀前は仰向けに青空を見ながら寝そべっていた。

そこへ、忍び足で近付いた幼い少年は、秀前の足元に立つと、叫び、なんの躊躇いもなく、真剣をふりおろした。

体の小さい少年には似つかわないその真剣は、少年と同じくらいの刀身でよろめきながらも、秀前に的を絞り刃が牙をむく。

ザン、と地にはえていた芝生が空を舞い踊った。

刃が秀前に当たる、と思った途端、少年は秀前を見失っていた。

確かに目の前にいたハズなのに…。

「クソッ！！どこに……っっ！！」

突如、空気が変わった。

先ほどまでの、春の香りをただ寄せていた穏やかな空気が、一瞬で氷ついた。

と共に、少年は背中に嫌な汗をかいていた。

首筋にあたる、ヒヤリとした生々しい感触。

後ろに誰がいる。とは分かってても、少年の中にある本能が振り向いてはいけない、と危険信号を送っていた。

その原因は。

——凄まじい程の殺気。

「つつ……—」

首筋にあたる感触が、少しずつ強くなっていく。
少年からは血の気がひいた。

「……あれ？司魁？」

我にかえった秀前の、なんとも穏やかな声に、司魁と呼ばれた少年も、自我を取り戻した。

いつの間にか、殺気は消えていた。

氷ついた空気が幻だったかのように、春の香りが優雅に漂っていた。
首筋にあたる感触も、なくなっていた。

見れば、それであろう小刀が秀前の懐におさめられていた。

「お前だったのか」。寝ているときは敵に敏感だから、触っちゃダメだぞ？」

そういうのは、先にいってくれよっ……生きてて良かった…。

ケロリ、と何事もなかったかのように言い放つ秀前に、司魁は負けじと言い返した。

「ていうかさ、もう少し手加減とかしたらどうなの？子供相手に大人げないよ」

秀前に目を向ければ、先程寝転んでいたせいか、アチコチに桜の花びらがついていた。

司魁は呆れてため息をつく。

「いや、してるにはしてるんだぞ？これ以上、手を抜くと俺が死ぬからな」

冗談なのか、本気なのか…。

おどけたように笑う秀前からは見抜けなかった。

「ふん………」

司魁はニヤリ、と笑った。

「え………」

秀前は嫌な予感を察知し、司魁から一步一步と遠ざかる。

「あれ？なんで逃げるの？」

その意地の悪そうな笑みが、アイツと重なって見える。アイツがこの表情をした時は、絶対に何かを企んでいる時に見せる表情だった。
「な、何を……」

企んでいる？と、用心深くまた一步と下がる。
その時、司魁の口端がつりあがった。

「しゅーちゃんっ！！！！」

「のわあっ！！！！」

背中に鈍い衝撃。

体にかかる、いつもより重たい重量感。

耳の鼓膜がやぶれてしまいそうなほど大きな声が、秀前の名前を可愛らしく呼んだ。

「く、空也……」

聞き慣れた声に、ハハ、と苦笑いを漏らす秀前。
今にも心臓が胸を突き破って出てきそうな勢いで、やかましく音を早めている。

それも徐々におさまり、背中にしがみついているであろう空也に振り返った。

「っ！？」

首を後ろに回した瞬間、また胸の鼓動が早くなった。
鼻と鼻がくっついてしまいそうなほど、近くにある空也の顔。
目が合ったかと思うと、空也はニツ、と無邪気な笑顔を見せた。

「…っ」

その瞬間、秀前は顔が爆発しそうな程、熱く感じいた。
いや、実際に熱いのだろう。

思わず腰を抜かして、力なくして地に尻をついた。

「おゝ！！やったな、兄上♪」

「やったな、司魁♪」

なにが楽しいのか、目の前で笑いあっている兄弟を見て、秀前はため息をついた。

秀前の視線に気が付いた二人は、ほぼ同時に秀前を見て、そして再び顔を見合わせて、秀前に2本指をつきだした。

「「先駆けの秀前、破れたり！！」」

見事声が重なった

兄弟は、顔も中々そっくりで、双子に見えなくもないほどだ。

秀前は倒れたまま、肩を叩きあう兄弟を見上げた。

…アホか。

そう思わずにはいらなかった。

「——ちゃ……」

ん？

ねむ……。

「ヒデちゃん」

誰かに呼ばれて、うつすらと目を開けた。

白い天井とまぶしいくらいの光が視界いっぱいに広がる。

そして横には、学校内でも美人保健医と称される先生がいた。

「早く起きないと、チューしちゃうよ？」

「……生徒襲うと、クビがとびますよ」

「あら、起きたの……」

つまんな……い、と口を尖らせて、残念そうな表情になった。

「起きろ……って言ったの誰ですか」

長いウェーブのかかった髪を、かきあげるようにして、目線を流し
てくる。

その様子を、無感動に眺めていると、先生は眉をよせて首をかしげ
た。

「おつかしいな〜？ドキッ、ってしなかった？」

「あんたは馬鹿ですか！！」

秀秋はそう言うと、保健室から脱出した。

学校につくなり、保健室に誰もいないことを確認して、ベッドにもぐりこんでいたのだ。

どれくらい寝たのかは分からないが、とりあえず長いことは分かった。

窓の外を見ると、部活動生が校庭で励んでいたからだ。

「司魁…かぁ」

懐かしい夢を見たもんだ。

あれは秀前の記憶ではなく、俺の記憶だ。

以前に一度、まったく同じヤツを見たことがあったからだ。

確かに秀前の夢は毎日見ていた。

俺自身が成長していくに伴って、夢の中の秀前も成長していく。

今朝の夢を最期に、もう見ることはないだろうと思っていた。

秀前は死んだ。

つまり、成長も止まり、俺は夢を見なくなる。

司魁もすでに…。

「…あれ？」

秀秋は首をひねった。

そういえば、司魁はあまり夢にでてきてないな。
同じ屋敷に住んでいたハズなのに…。
最後に見たのは…いつだった？

「司魁って、死んだのか？」

つながらない記憶が、秀秋の頭をぐるぐると巡っていた。

そして事件はおこった

「……何やってんだ、お前ら……」

それが、俺の唯一のなごみ場でもあるテリトリー（家）に入ったときの第一声だった。

いつもなら、実家にいた時のクセで

「たーいまー」というのが第一声で、自由な生活に戻るというのに……。

今日は違った…。

「ふぉ！ヒヘヒイ！！」

食べ物を口にこれでもかと詰め込んだ空が出迎える。

いや、出迎えるといっても、ドアを開けると見えるリビングのところから、首だけ回しているだけだが。

空の声で、鍋と必死に対峙していた司もやっと俺の存在に気づいたらしく、顔をあげて

「おかえり、ヒデちゃん♪」と微笑んだ。

「うん、ただいま。で、何やってんだ？」

つとめて優しく、問掛けてみる。もちろん、表情は憎しみの笑顔を浮かべて。

「え……えっと」

流石、司。

賢い妹は、俺の怒りを察知したのか、怯んでなんとかごまかそうと
している。

「見て分かんないのか？ やっぱ馬鹿だな、ヒデは。鍋に決まっ
てんだろ！ ナ・ベー！」

どんなに怒気を含んだ目でも、空はかわりなく、鼻唄混じ
りに鍋をつついていた。

「ちよつ、空…」

教育の行き届いた司は、なんとか空に俺の状態を目で訴えているが
…。

そこは、馬鹿な我が弟。

ちつとも気づきはしない。

「ふん…？」

パキパキと手をならして、空にゆっくりと近付いていく。
流石に空も感付いたらしく、ビクリ、と肩を震わせた。

「俺が馬鹿だと？」

「あ、イヤ…」

「今回のテストで全教科満点をとった俺を、全教科合計しても10
0にも届かなかったヤツが馬鹿にしているのかな？」

「うつ…なぜそれを…」

テストを受け取った時点で、その答案は燃やした空にとっては、なぜ秀秋がしているのが不思議だった。

テストの点数をひっぱりだされた上に、口で秀秋に勝てるハズもない空は（力もかなわない）、なんとか距離を開こうと後退していくが、そこは独り暮らしの部屋のリビングであって、そんなに広さもないせいで、空はあっけなく秀秋に追い詰められていた。

「あ、兄貴……」

「ん？…なんだ？」

ニツコリと笑いかけてやる。

しかし空は脅えた表情を見せるだけ。

そして俺の手元を指差して、恐る恐る口をひらいた。

「それは、ナンデスか……？」

「ああ、コレ？」

俺は手に持っていた箸をカチカチとならした。

「箸に決まってるんだろ。やっぱ馬鹿だね、空は」

「いや、それは分かるんだけどね？箸だということは一目瞭然なんだけどね？……なにをする気？」

そう尋ねながら、チラチラと空の視線は鍋の方へ向いていた。もちろん、俺がもっている箸も鍋の方をむいてるんだけどね。

「何って…決まってるんだろ？鍋が大好きな空くんに、優しいお兄様が食べさせてあげようとしているんじゃないか」

今から起こるであろうコトを思うと、空は目に涙をためていた。

きつと、鍋の中でグツグツと煮込まれている具を口の中に――

あゝ あゝっ！！！！

考えただけでも恐ろしい！！

「さあ…口をあけて？」

「やつ、やだ！！」

フルフルと小刻に首を横にふって、魔の手から逃れようとするが、体格のいい秀明から逃げられるわけもなく…。

「ほら…」

クイ、と長い指が空の顎を捕えて、上を向かせる。

右手には、しっかりと箸でこんにやくがつかまれていた。ほかほかと湯気が漂っている

「ううっ…」

歯を悔いしばって、口をなんとかしてでも開けないようにと引き結ぶ。

「自分であけないと、無理矢理こじあけるぞ」

う…それもやだ!!

空は泣きたくなっていた。

一方、秀秋は実に楽しそうだった。

どんどん互いの顔が近づき、あと数センチで鼻と鼻がくっつきそうな時…。

カシャ…

「ん?」

秀明と空は、同時に振り向いた。

「あ……」

バツの悪そうに司は、両手で構えていたカメラを後ろに隠した。それを見た秀明は、空の顎にあてていた左手をはなし、司に近付いていた。

「なにを隠したのかな? ツカサちゃん」

ニツコリ笑顔で。

怯んですぐにカメラを渡すと思っていたが、意外にも「なにが?」と聞き返してきた。流石、前世が司魁なだけある。

度胸だけは備わっている。

「なにつて、うしろに隠したヤツ」

「あ、コレ？つて、ちよつとお」

とぼけたように、うしろからデジカメを取り出したのを見て、さすがデジカメを奪う。

カメラを手に取ると、メモリーを開いて液晶を見た。

「……………」

…思わず、言葉を失った。

「……………なんだコレわ…」

「名付けて！！『禁断の兄弟愛（裏）』 キヤー、パチパチ」

ご苦労ながら、効果オンまでつけてくれた。
ちつともありがたくないけどな。

メモリーの中には、めくるめく俺と空の。。。。（ピー）な世界が広がっていた。まさに（裏）。
見事にうまい角度から撮った写真（見ようにはキスしてるように見える）や、あきらかに合成だろ！！と突っ込みたくなるようなフンな写真。

どうやって撮ったのか全くわからない、カメラ目線の2ショット。
先程撮ったと思われる、危ない雰囲気漂っている写真。

わゝ、デジカメってこんなに保存できるんだゝ！！
と、感心させるほどの枚数が入っていた。

「禁断の…兄弟、愛…？」

…なんて不吉なモノを作るんだ、この妹は！！！！
俺は過去を繰り返すつもりはないのに！！！！

「セットで3500円ですゝ」

なんて恐ろしいVサイン…。

どうやら司は、コレらを売ろうとしているらしい。こんなものを誰
が買うんだ！！

とりあえず、没収。

「あゝ！！私のコレクションゝ」

「なにがコレクションだ！！肖像権の侵害で没収」

ポケットにしまい、キッチンに向かう。

はあ、とため息をつく司だが、取り返そうとはしないらしい。
あきらめたか…。

「…………ん？」

あれ？

どうして？

ナゼ司がデジカメをもっている！！？

クルツ、と振り返った司は、笑みを浮かべていた。

「甘いよ、オニイちゃん」

「……っっ……」

ブン、と腕をふって取り返そうとは腕を伸ばすが、身軽な司はヒラリとよけてしまった。

勢い余って、空に突っ込む秀秋。

本気で痛がる空。

呑気に笑っている司。

そんなこんなで、夜は更けていった……。

翌朝——…。

落ち着け……。

少し落ち着けよ、俺？

大丈夫だ。きつと大丈夫！！

「……………」

目が覚めた途端、視界に飛込んできたソレで、俺の目覚めはスッキリ爽快。

それはもう、いままでにないつてくらい目覚めのいい朝だ。

気分は最悪だがな…。

「大丈夫…大丈夫…」

何度も自分にいい聞かせる。

なぜかって？

そうでもしないと、今にも雄叫びをあげてしまいそうだからさ。
…ちよっとテンションがおかしいな、俺…。

とりあえず、目をそらしたソレにもう一度視線を戻した。
…が、やっぱりそらした。

無理だ…っ！！

俺に現実を見つめるなんて無茶すぎる！！！！

「そ、空くん…？」

とりあえず、今の現状を知るために、俺の腕の中で上半身裸のまま

で眠っている空を起こした。

ナマエ

時は遡り、昨夜のコト――…

「あゝ… やつと眠れるー!!」

秀秋は解放感を味わいながら、ベッドに倒れこんだ。

アレから数時間と、司 & amp ; 空 vs 秀秋でデジカメ争奪戦を繰り広げられていたため、すでに時計の針は12時を回っていた。

結局、デジカメを取り返すことはできず、メモリーはすべて消去するというので、没収はあきらめたのだった。

空と司はたびたび泊まりに来ていたので、既に二人の部屋（寢床）は確保されていて、そこに二人を押し込めたあと、秀秋はリビングの片づけをすること30分…。

やっとの思いで、自室に戻ってきたのだ。

疲れがたまっていたせいか、仰向けの状態になるだけで眠気が一気に襲ってきた。

ウトウトとしながら、目覚ましアラームをセットすると秀秋はそのまま眠り込んでしまった。

そして数時間後――

規則正しく刻みこまれる秒針は、静かな部屋をより一層強調するか

のように響いていた。

突然、秀秋の体がむくり、と起き上がる。

しばらく、何を反応することはなく、それからしばらく経って、虚ろな目があたりをキヨロキヨロと見渡し始めた。

何を見つけたのか、視点を定めてそこへ手を伸ばす秀秋。

その手につかまれたのは、ガラスの入れ物におさめられた写真だった。

愛おしそうに、秀秋の指がその写真をなぞる。

『く……う、や……』

部屋に響いたその声は、不思議な響きだった。

儚くて、小さくて、今にも消えてしまいそうな声なのに、ソレは空気を震わせた。

秀秋の口から漏れたハズのその声は、どこから聞こえたのかわからない。

音源がハッキリとしないのだ。

秀秋はベッドから降りると、写真立てを持ったまま、部屋を出た。その足取りは重そうに、若干、右足をひきずっていた。

そして何かに引き寄せられるように、そのまま足は空の部屋へとむかった。

何のためらいもなく、そのドアノブをひねる。

カチャ、という音とともに、部屋には微かな光がさしこむ、そして

再び暗くなった。

秀秋がドアを閉めたのだ。

ベッドで眠る空のそばに立つと、ただその顔を見つめといた。その口は常に小さく開かれており、小さな寝息が呼吸をきざむ。

そんな空の顔を見ながら、秀秋の頬には涙が伝っていた。しかし、その表情は無表情そのもの。

「ん……………」

部屋の空気に違和感を覚えた空は目を覚ました。普通ではない、部屋の温度。それは身震いするほどの寒さだった。あまりの寒さに暖房のリモコンを手探りに探す。あたりを見渡すが真っ暗でとても見えたモノじゃない。

「ん？」

手に何かが当たった？

そう思い、暗闇の中で目を凝らす。

「うわっ！？秀にいい！！」

驚きのあまり、眠気が一気に吹っ飛ぶこととなった。

空は少しでも部屋を明るくするために、カーテンに手を伸ばし、月明かりをまねき入れる。

そこで、初めて秀秋の表情があらわとなった。

焦点のあっていない虚ろな両目が、確実に空を捕えていた。

空が驚いたのは、その目に浮かんでいる涙だ。

次から次へと、頬を伝っては落ちていく透明な滴。

初めて見る、そんな兄の姿…。

ベッドから降りると、空は秀秋の真正面に立ち、その落ちる涙を掬い上げるように頬に触れた。

「…ヒデ？」

空は兄のなまえを呼んだ。

すると、秀秋の表情が初めて悲しみの色に染まる。

焦点は定まっていけないのに、その虚ろな目が空を見る。

「兄貴……」

空は呼んだ。

しかし、それが秀秋の暴走の引金となった。

「っ!？」

それは一瞬のことだった。

空の小さな体は、あっという間に秀秋によって組み敷かれていた。

空は頭の横に手をつかれ、上には体格のいい秀秋の体という、身動きのとれない状態にあった。

「秀秋… だけよ」

いつもとは違う秀秋。

目の前にいるのは秀秋ではないと気付いた空は、恐怖心かられていた。

額に冷や汗が浮かぶ。

しかし、傷付いたような表情で涙を流す秀秋には胸をつまらせる何かがあった。

「兄っ…ん…!!?」

何とかいつもの秀秋に戻ってもらおうと、再び呼ぼうとした、その時だった。

言葉は遮られ、口は、秀秋の口によって塞がれた。

「ちょっ…兄貴!？」

なんとか一瞬だけ口を離すことが出来たが、それもまたすぐに塞がれてしまう。

口を塞がれている息苦しさ、空の目には生理的な涙が浮かんでいた。

「…っ…、ハッ」

口から溢れるほどの唾液が、秀秋の舌とともに絡み付いてくる。必死に抵抗しようと、肩を押し上げてみたりという試したが、力で敵わない上に体格が違いすぎる。さらに上からおさえつけられているせいで、体重までもがプラスされていた。

空は仕方がない、と思いながら、口が解放される時を狙って大きく

息を吸い込んだ。そのまま力を右手にためると、秀秋の溝を的確に狙う。

それは、完璧な溝落ちとなった。

「うつ……」

苦しそうに顔を歪ませて秀秋は力が抜けたのか、全体重を空にかけた。しかしうめき声は聞こえるものの、どうやら正常には戻っていないらしい。

「ヒデアキ!!!」

空は叫んだ。

音楽の授業でしかやったことがないような、腹から声を出すように。その声は一人部屋に響くには必要以上な声の大きさだった。

その声に秀秋の肩が震え、プツリ、と思考回路が途切れたようにピクリとも動かなくなった。

耳元で聞こえるものの穏やかな寝息に、空はホッとため息をつく。

しかし、落ち着いたのはいいものの、体格が違いすぎる秀秋を上から退かすのは、今の空でなくても無理な話だった。

仕方なく、秀秋を子守唄に空は再び眠りにつけたのだった…。

「そ、空くん…?」

戸惑い混じりの声で、目が覚めた。
目の前にあるのは、鬼畜笑がよく似合ういつもの秀秋の顔。
ほっ、と安堵してため息をついた。

「な、なんで…?」

やっぱり、昨日のことは覚えていないらしい。

空は秀秋直伝の鬼畜笑を浮かべて、耳元で呟いた。

「なに…弟襲っちゃってんの?」

その言葉で秀秋は一瞬にして顔を真っ赤に染めた。
途端に、カシヤツ、という音が聞こえる。

二人同時に振り返ると、そこには嬉々とした表情の司の姿があった。

「そこまで妹想いじゃなくていいのに…」

片手にはもちろん、カメラをかかえていた。
それを見た秀秋は、司からカメラを取り上げるために追い掛けて部屋を出ていく。

空はそれを見送ると、ベッドに座りなおした。
意味深に天井を見つめ、溢れる涙を流した。

「あれ…なんで…っ」

空自身も戸惑っていた。

なんで俺泣いて…？

そこで空の意識は途切れた――。

『秀前……』

その開かれた虚ろな瞳から、涙は溢れた…。

魔女の微笑み

「ね…眠い……」

机に伏せたまま秀秋は呟いた。

昨夜のことは結局、ワケの分からぬままだ。

空に尋ねても、馬鹿の言葉はひとつも要点が掴めず。

司は司で盗み撮りしていた写真を決して渡そうとはせずに、おかげで朝まで司を追い掛けまわしていた。

お陰で眠ることなどできるはずもなく…。

寝不足登校。

一瞬でも気を抜けば、眠り倒れてしまうのは目に見えていた。

「へ〜めずらしいこともあるもんだな。寝起きだけはいいい前が欠伸なんてな。てかお前でも欠伸なんてすんだな」

いったい人を何だと思っているんだ、的な発言をしたのは、幼馴染みの中野智也だ。

もの珍しそうにまじまじと俺の顔をのぞきこんでくる。

秀秋は今日何度目かも分からないため息をついた。

「それは今、俺の顔を見てため息をついたと考えていいのか？」

「すげー言い掛かり…」

ため息をついた時に、たまたま智也の顔が目の前にあったただけだ。それに、今は俺は智也の相手してやるほどの元気はない。

「ゴンゼ、頼む！！俺を寝かせてくれ……」

…消沈。

なぜか智也の前世の名前を呼んでしまった俺。

そつと病んでるな、俺…。

「ゴンゼって誰だよ…てか、おい！！秀？眠いなら保健室にでも行けよ」

「保健室！？あそこにはチラリズム魔女がいるんだぞ！！！！危険…だ…」

ゴイン、という痛そうな音をたてて、秀秋の頭は机に落下した。

「お、おいつ、ヒデー！？」

いきなり動かなくなつた秀秋を心配そうに揺さぶり起こしてみるが、返事はない。

「！」

トモヤは、揺さぶるのをやめて、小さくため息をついた。

「どうした、トモヤ！？スゲー痛そうな音が…」

遠くから密かに二人の様子をうかがっていた久堂一樹くどういつきが、秀秋がい

きなり頭を打ったのを見て、あわてて駆け寄ってきた。
しかし、その時すでにトモヤは落ち着いていて、呆れたように肩を
すくませた。

「…寝てる」

「はあ？」

一樹は机に伏せた状態のままの秀秋を見た。確かに、微かにおだやかな寝息が聞こえる。

それを見た一樹は笑いだし、タイミングよく授業の始まりを告げる鐘がなり、科学の教科担任が教室へと入ってきた。まだ座っていなかった二人を見て、席につくと促されるが、二人は秀秋の体を支えながら立ち上がらせた。

「この馬鹿、保健室に連れていきます」

「あ、ああ…」

一樹はその一言を告げると扉を閉めた。

教科担任は呆然としながらも、気を持ち直して授業を始める。それを確認するように、ひそかに聞耳をたてていたトモヤと一樹は

「やったな！」と言って、互いの拳をあわせて笑いあった。

「……………？」

目が覚めて、はじめて視覚に入っただのは真っ白な天井だった。
なんだかデジャヴを感じた。秀秋は寝返りをうって、再び夢の中へと堕ちていった。

「……………！？」

そして再び目を覚ましたとき、驚いて思わずその目を見開いた。
目の前わずか3センチ先には、どこかで見たことのあるような肉の塊。秀秋は此処が保健室であって、この肉がその魔女のモノだと気づくのに時間はあまりかからなかった。

「あら、起きちゃった？」

顔をのぞきこんでくる魔女は、残念そうに呟いてベッドから降りた。
なんでヤツがベッドから降りたかって？そんなもんはソコの魔女に聞いてくれ…。

「なにしてくれちゃってるんですか？」

半分呆れながらも、できれば聞きたくないがココは聞かなくてはいけないだろうと思い尋ねてみる。

「何って…夜這い？あ、でも夜じゃないから昼這いかな？それとこ寝込み襲いかな？」

この人わ……っ！……！！

「どっちでもいいですよ、もう。てか、寝込み襲われました…って言ってクビにしますよ？」

冗談半分本気半分で脅してみると、魔女はニッコリ笑った。

「あら、そうになると貴方たち3名を除くこの学校の男子生徒全員を敵に回すことになるわよ？」

「……………」

……おそろしい。

俺を追い掛けてくる男共を想像するのも怖いが、そんな繊細な男共の心を平気で利用する魔女が一番怖い。

つか、笑いながら言うことじゃねえ…っ。

「今日はラッキーだったわ、ヒデ君とトモ君とイツ君をセットでみれるなんて。」

…ということは、俺を此処に連れてきたのはアイツラか。さっきの

「貴方たち3人」というのも、俺とトモヤと一樹のことだろう。秀秋は心の隅で、保健室に運びやがった二人を恨みながら、ベッドを囲んでいるカーテンをにらみつけた。

すると、シャツという音をたててカーテンが開かれた。カーテンを開けたらしい少女は俺の顔を見て、驚いたように目を見開いた。

「先生、注文してたヤツ……ってあれ？ヒデちゃん!？」

「司……」

「あ！司ちゃん♪」

魔女は司に駆け寄ると、軽く抱擁をして何やら二人で話をしはじめた。

司は戸惑いがちに、俺と魔女を見比べている。

「なにしてたんですか？」

「白雪姫……っ」

魔女は楽しそうに司の問いに答えた。

嘘をつくな嘘を。

「へへ眠りの王子に先生がキスしてたんですか？」

未遂だよ未遂。

つか、なんで司は話を理解しちゃってんだよ。

「ところで司ちゃん、例のもの……」

「ああ、ハイ。セットで7800円です」

そう言っただけで、何冊かの本を魔女に渡した。

そして、おつりなしの金を受けとり、颯爽と保健室から逃げようように退散していった。

「あれ？司、一緒に帰らないの？」

「あ、空！今日は危ないから友達と帰るね」

そんな会話が、廊下のほうで聞こえて、少しだけ嫌な予感がした。

危ない、ってなに？

空は俺の鞆を持ってきたらしく、なんとも偉そうな態度だった。

「ヒデにいの鞆持ってきたぞ！！」

「ん、ああ。サンキュ……」

空から鞆を受けとり、チラチラと魔女を見ている。

あの本はなんだ？

「……つつ／＼／＼萌え／＼」

なんか危ない発言してるし……。

俺はさりげなく魔女の背後へとまわり、その本をのぞいてみた。

「……………」

「……………」

俺も空も絶句。

「こゝこゝこのカメラ視線がセクシーすぎっ……!!」

「……………」

「……………」

もちろん、このあと司に説教をくれてやったことは言っまでもないだろう…。

違和感

「どうしたの？ヒデにい」

突然、何の前触れもなく空がそんなことを言ってきた。

いつものように空たちが家まで訪ねてきて、しぶしぶ学校へと向かっている途中のことだ。司にも、空が突然言い出したことを理解できないらしく、首をかしげながら空を見ていた。

「は？何が？」

俺は先程まで、普通に歩いていただけだ。

首を傾げている俺たちに対して、空は当然のことでも言つかのように、俺の足元を指差す。

「え、何がって…それ」

秀秋は一旦立ち止まると、空の指差した足元へと目をうつす。しかし、特にこれといった異常は見た限りなかった。

空はじれったいようで、何かを伝えようと沢山の単語を並べては意志疎通を図ろうとしている。が、元々、文法力なんて備わっていない空の言葉は、並以上の頭脳をもつ秀秋と司に伝わるわけもなかった。

「だーかーらー！！！！たく、こういう時こそ三つ子は以心伝心して分かりあうものなんだぞ！！」

「全然伝わってこないよ。空の念力が足りないんじゃないの？」

「つか…餓鬼か、テメエは」

なんとも子供のような空の発想には、呆れてため息も出ない。とりあえず無視して、再び通学路を歩き出す秀秋。しかし、そんな秀秋を見ていた二人は一向に歩き出そうとはしなかった。

「だろ！！だろ！？司」

「うん…」

妙にはしゃいだ声と、考え込んでいるような声。秀秋は再び足を止めて、振り返った。そこには、秀秋の足元を注意深く見ている司の姿があった。

「ねえヒデちゃん、もう一回、向こうに歩いてみて？」

訳の分からぬまま、秀秋は司の言葉に従い、言われた方へと歩いた。すると司の方から、「ホントだ…」という呟きが聞こえて振り返ってみると、司は空の通訳をするように話始めた。

「秀ちゃん、微妙に足引きずってるよ」

「え？」

「右足だけ浮いてる」

少しだけだけどね、と顔をしかめている司。確かに、歩いてみると無意識に右足をかばうように左足に体重をのせている自分に気がつく。しかし、意味もなく足をブラブラと振っ

てみたり、地面を蹴りつけたりしてみるが、痛みを感じたりはしなかった。

それがまた、変な違和感を感じさせる。

「ホントだ…」

「ホントだ、って気付いてなかったのか？」

「ああ」

だって痛くないし。

無意識にかばっていたのだから、気付いているハズもない。いつたい何時からだ？

「秀ちゃん、どうせ授業サボるでしょ」

突然の肯定混じりの司の問いに、秀秋は隠すこともなく頷いた。

「病院行ってこれば？」

一見選択肢のあるように見えるが、拒否権なんて自分にはないだろうと秀秋は悟った。

空はともかく、司は本気で心配しているらしく、その目は至って真面目だ。きっと、力づくにでも俺を病院へ連れていく気だろう。

「…分かったよ」

秀秋は、司に変なもので脅されないうちに、しびしびと頷いた。

はあ、とため息をつく、ますます憂鬱になる秀秋だった。

「捻挫です」

医者は言った。

「……………は？」

思いもよらない医者の診断結果に、秀秋は思わず聞き返していた。

憂鬱な気分のまま、秀秋は司に従い病院へと来ていた。

数分間待たされた後、診察室に入り、レントゲンらしき写真をとられ、さらにまたされて……と、今に至る。

秀秋の前には、50代くらいのメガネをかけた、いかにも医者という感じの老人がレントゲン写真を見ていた。

「…ワンモアブリーズ」

「捻挫です」

…っん。

どうやら、異常だと思っていた俺の耳は至って正常だったらしい。なら、おかしいの目の前にいる医師だ。もしくは機械だ。

と思っていた矢先、「機器は最新型を使っていますので正常です」と言われた。

（なんだこの医者…。心読めんのかっ!？）

「私の名前は津崎一郎です。ここの院長です。得意なことは読心術です」

「そりゃ、どうも…」丁寧」

「なワケないでしょう。得意なことは診察です」

医者は無表情のまま淡々とはなしている。

てか、さっきの読心術のほうが妙に説得力ありすぎる…。

「んじゃあ、その得意分野の診察は…」

「捻挫です」

「……………」

このままだと、永遠に終わらなさそうなので、とりあえずあきらめた。

さらには「どうしますか?」と聞かれて、なんと答えればいいかも分からず、秀秋は逆に「どうすればいいですか」と聞き返していた。

「まあ、とりあえず……早くなおしてください」

…自分でも思うが、無茶な注文だ。

「分かりました」

分かっちゃったのかよ!!

そんな風に心の中で突っ込みをいれながらも、なぜか目の前で指をパチン、とならす医者を見ていた。

指パッチンを合図に、背中を向けていたドアがガラリとスライドされる。

そこから入ってきたのは、スパルタママのようなメガネをかけた看護師だ。

なんとも慣れたような手つきで、迅速に包帯を足に巻いていく。さらには担ぎ上げられて病院の外に貸し出し用の松葉杖とともに投げ捨てられてしまった。

「運動は控え目に。安静にしとけばきつと1週間くらいでなおるでしょう」

そっぴい捨て、背中を向けて医師は再び病院の中へと姿を消した。

「なっ… なな……？」

秀秋は理解不能な言葉を発しながらも、松葉杖を手にとり、歩き出した。

その後ろ姿は、妙に暗かったという……。

「おつかえり」

病院から帰りついた時にはすでに学校は終わっていた。なぜか二人は今日も勝手に俺のテリトリーへと侵入していた。

「で、どうだった？」

二人同時に尋ねてきたので、秀秋は医者セリフを思い出しながらにつこりと微笑んだ。

「捻挫です」

「………は？」

流石兄弟と言うべきか……。反応が全く一緒だ。

秀秋は固まっている二人を無視して、自室に向かい、ベッドにそのまま寝そべった。

頭には、足の怪我に気付いた時からずっとアイツの顔が浮かんでいた。

（この足はオマエのじゃねえんだぞ……秀前——…）

過去と未来をつなぐもの

ある小さな病院の前――

一人の青年がそこまで高くもない病棟を見つめていた。

一見、病気の恋人に会えない寂しさを紛らそうと、一目見ようと彼女の部屋の窓を見つめているようにも見える。

彼女への大きすぎる想いがテレパシーとなり、彼女が窓から顔を見せてほしいと願う……そんな切なさそうな表情をしていた。

しかし、それは彼の美貌が生み出した幻にすぎなかった。

青年に魅了されてしまった回りの女性たちは胸打たれていた。

しかし、どのどいつが言ったかなんて知らないが、「人の夢は儚い」と妙にかっこつけて言っていたヤツがいたとかいないとか……。

その言葉は多くの人間を納得させた（らしい）。

そして、その納得した人間がまた一人と存在したのだった。

「さあ、ヒデにい！！勇気を持って行くのよ！！」

どこからともなく現れた、青年の妹と思われる少女が兄の背中をそっと押す。

幻のままだったなら、きっと弱気な兄を励ます妹という感動の名シーンに見えなくもないだろう。

しかし現実――…。

「嫌だ！！だってここの医者、絶対ヤブだって！！」

「我儘言わないの!!」

半べそになりながら、美男子は決して病院に入ろうとはしない。

秀秋はアレから1週間、辛い毎日を送っていた。

ギブスをはめたその日から激痛に襲われ、夜はたいして眠ることができない。そのたびに秀秋は「あのヤブめえ……」と医者进行を憎み、二度とあんな病院に行くかと心に固く誓っていた。

しかし、誓った早々、早朝に司に叩き起こされ、そのまま病院前へと連行されていた。

「ヤブ医者だけには嫌だっつ!!」

まるで小さい子どものようにしゃがみこんで、司に引きずられていく。

どうにかして司から逃げなければ!!と思考をフル回転させていると、秀秋はトントンと肩を叩かれていることに気がついた。

「ああ?なんだ……よ……」

振り返った瞬間、後悔の念が一気に押し寄せてくる。

「ハロー。ヤブ医者ですが………なにか?」

凄味を効かせた50歳代のオッサンは、無表情に手をあげて見せた。そして、固まっていた秀秋の首根っこをつかみ、病院の中へと引きずっていったのだつた――…。

――20分後…。

病院から出てきた秀秋の表情は、診察内容を知らない司にでさえ伝わってしまうような、そんな絶望な表情だった。

「お、お疲れ様。どうだった？」

足元に目をやると、20分前までつけられていたハズのギブスは取り外されている。しかし、妙に脛の部分が赤くなっていた。

「アノヤロー…、ぜってえヤブ医者って言ったの根にもってやがるぜ」

その脛を擦りながら、秀秋は呟く。
その後ろを悠然とした態度で歩いている医者は、「ハハハ、マタナ少年」と言いながら去っていった。

そんな医者を見ていると、今度は司に首根っこを捕まれ、引きずられていく。

秀秋はもう抵抗する気力もなく、されるがままの状態だ。

「あれ？どこ行くんだよ」

「へ？どこって学校に決まってるでしょ」

当然のことかのように言う司に、秀秋は文句タラタラだった。

「はあ？今から！？確かに制服来てるけど…え…さぼる気満々だったのに」

泣き言をもらす秀秋を気にすることもなく、司は秀秋の手を引いて学校へと歩き出したのだった。

「あれ？来たんだ」

人の顔を見るなり、そう呟いたのは一樹だった。食堂近くの自販機から買ってきたと思われる紙パックのジュースのストローをくわえていた。すでに飲み終わったのか、口だけでそれを支えている。一樹の言葉は訳すると、まあ…「サボると思っていたのに」だ。

「司が無理矢理引っ張ってきたんだよ…」

「ふん、今更？」

たしかに。

秀秋と司が学校へとたどり着いたのは、既に昼休み中盤に差し掛かっていた。

行く先々で秀秋はものにしがみついたり抵抗していたので、時間が長引いてしまったのだ。

秀秋としてはそれが狙いだったのだが、司は気にすることもなく秀秋をわざわざ教室にまで送り届けてから司も自分の教室へ戻ってしまったのだった。

秀秋はとりあえず何かを腹の中へいれようと食堂へ向かっている途中、一樹にバツタリと出くわしたのだ。

「珍しいね、空と一緒に行かないなんてさ」

「司が言ったらしいんだよ…」

『ヒデちゃんと空が揃うと、二人して学校サボろうなんて言いそうだから、空は学校に行つて。秀ちゃんは絶対に学校に行かすから！！』

「…つて」

「あははは！！流石は司ちゃん！二人の性格よく分かってるじゃん！！」

一樹は腹を抱えて笑う。

秀秋ははあ、とため息をついた。

「ホントだよ。いつものふざけた司と真面目な司…すげーギャップ…」

「だからもてるんだね。ま、もててるのは司ちゃん一人じゃないんだけど」

チラリと俺の方へと目を向けてくる一樹に、俺は胸を張って見せる。

「ん、まあ、俺様は顔がいいからな」

そう言っつて秀秋は前髪をかきあげるしぐさを見せた。嫌味っぽく一樹に言っつてみたが、一樹は変わらずニコニコと笑っている。

「それは僕もだけどね」

ニコリと笑うその表情は、廊下を歩いていた生徒（男女問わず）にとつて脳殺ものだ。現に、多くの生徒が足を止めてこちらを凝視している。それを見計らったように一樹は一人の女生徒に近付いていた。

「あれ、顔があかいようだけど…大丈夫？」

下から顔をのぞきこむように、儂げな表情をつくる。

「はははは、はい！！全然大丈夫です！！」

顔は真っ赤。

今にも頭が爆発してしまいそうな勢いだ。

「そう。なら良かった」

そう言つて再び脳殺笑顔を女生徒に向けて、身を翻し戻ってきた。
秀秋は呆れたような視線を一樹に向けている。

「お前…性格最悪…」

「あはは、元々だよ」

「威張るなよ!!」

ビシッ、と一樹の頭にチョップを軽く当てた。一樹は「痛っ」と一瞬顔を歪めて頭を押さえる。

秀秋は気にすることもなく、スタスタと歩き教室へと戻った。

すでに時間は昼休みが終わる3分前。食堂で食べているヒマなどあるわけがなかった。

教室を見渡してみると、クラスメートの半数ほどが教室にいた。

その中には、秀秋のよく知る人物が笑いながら携帯を片手に誰かと電話をしているようだった。

そいつの元へ向かおうと足を向けるが、足を踏み出した途端に一樹に腕を引っ張られる。

「もー、秀秋！この僕にチョップなんて普通は出来ないことなんだよ！？それに、人の恋路を邪魔するやつは何とか…ってしらないの？」

「いや、知ってるけど……え？なに？アイツ彼女出来たの!!!」

驚きだった。

今まで、そんなそぶりを一度と見たことがないのに…。

「恋人、って言ってあげなさい。付き合ってるのかは微妙だけど…
うまくいくといいねえ」

恋人…？

「え…彼女じゃないってことは…男！！！！？」

過去と未来をつなぐもの（続）

「マジ!？」

「声がでかいよ、ヒデ」

そう一樹に言われて秀秋は慌てて自分の口を両手で覆う。チラリ、と盗み見るように横目でトモヤを見てみる。

聞こえてしまっではないかと、内心ドキドキしていたが、トモヤは変わらず携帯で楽しそうにはなしていた。

心の中でほっと、安堵の溜め息をつく。

廊下の窓に隠れるようにして、背中あわせにしゃがみこんだ。

「い、いつから...?」

初めて知った親友の恋人います発言に、秀秋は少しショックを受けていた。もちろん、トモヤが同性愛者だったことではない。

幼馴染み兼親友の自分が知らなかったことに対してだった。

幼馴染みのトモと一樹は、もうかれこれ17年間の付き合いだ。

「ん...俺も知ったばっかだよ。今朝初めて知った。朝も電話してて、しかもめっちゃ楽しそうに話してたから、誰かなって思ってた。トモがトイレ行ってる間にメモリ見たら、恋人カテゴリーでコウって名前が入ってた」

「へ...コウ、ね」

確かに男の名前っぽいな。

「コウ…?」

秀秋はその名前の響きに覚えがあった。しかし秀秋にそんな名前の知り合いはいない。

まさかと思い、記憶を巡らす。

「敵だ!!」

ふっ、と頭に浮かんだ顔に、秀秋は思わず叫んでいた。

「コウってあれか!? 妙に神経が図太くて、負けず嫌いで、生意気で、弱いくせにつつかかってきてたやつ!!!!?」

「え…いや、俺は知らないけど…」

あまりの秀秋のいきおいに、一樹はたじろいた。

「いつもいつも勝てなくせに、空也や俺に歯向かってきたあきらめの悪い…!!」

ぜえはあ、と息を切らせながらも語る秀秋は、もう完全に我を失っていた。

一旦呼吸をおいて、その場に再びしゃがみこむ。

「あんなヤツのどこが…」

「へー…お前、コウのこと知ってたんだ?」

後ろから聞こえてきたその声に、秀秋はぎくりとした。振り返ると、窓際越しにトモヤが秀秋と一樹を見下ろしている。

その顔は恐ろしく笑顔だった。

「あ…あれ？トモ君たら電話してたんじゃないの？ほらほら、戻って思う存分と話なさいな」

あははは…と苦笑いでトモヤを肘で軽くつつく。

トモヤの表情は、笑顔には笑顔なんだが、腹黒い笑みだ。なんとかこの場をやり過ぎようと、秀秋も必死に笑顔を取り繕う。

「楽しいおしゃべり…してたんだけどねえ。ヒデの叫び声が聞こえたから電話切ってわざわざ駆け付けてきたんだけど…電話切ることなかったじゃんって後悔してたんだけど…おもしろい話が聞けそうだから、まあいいよ」

「あ、あれはきつと…そう！お前の言ってるコウと俺の知ってるコウは別人なんだよ！！きつと、うん」

秀秋は自分で言っただけで自分で頷いた。これでトモヤが納得してくれればと期待していたが…そううまくいくハズもなかったのだ。

わずかながらも後退していた秀秋は、トモヤの力強い腕によって引き戻される。

運動神経だけなら、コイツに勝てるやつなどいるのだろうかと思ってしまうほどに、トモヤの体力&身体能力は秤しれなかった。

秀秋は抵抗することもできずに、ずるずるとトモヤの方へと引きずられる。

「そのわりには、結構性格があつてたりするんだよね。負けず嫌

いでプライド高くて諦め悪くて…」

「へ、へ…。偶然だな、きっと偶然だよ、きつと！！同一人物はないよ！！」

「…ま、いいけど。どーせ次の日曜日は4人で遊ぶんだし」

よ、四人…？

そんな表情をしていたのか、トモやは、自分・一樹・秀秋の順に指差していった。

「へ…？」

「じゃ、そゆことで」

時が過ぎるのはあっという間だと、昔誰かが言っていた――…。

それにしてもね、僕はあまりにも早すぎると思うんだよ。な〜んか、

気がつけばもう日曜日？みたいな？

「みたいな…」

「「は？」」

「ああ…いや、気にするな。ただの独り言だとも……」

あまりの時の流れの早さについていけない秀秋は、憂鬱に浸っていた。

先日――…

キンコンカーンコンと、ありきたりな鐘がなり、秀秋は解放されたと安堵していた…ところに、担任がやってきてS H Rを始めた。

なぜ？と首を傾げてカレンダーを見ると、今日が土曜日だということを知る。

（あれ？じゃあ…なにか？俺はわざわざ担任の話を聞くためのだけに学校にきたわけ？）

そんな表情でトモヤと一樹にアイコンタクトを送る。ものすごい哀れみの目で見られた…。

S H Rも終わり、あまりの衝撃の事実に放心してしまった秀秋は机に突伏していた。

一樹とトモヤに無理矢理立たされ帰途につく。

そして別れ際に言われた。

『『また明日!!』』

そして明日が今日なのだ。
俺はここにいるのだ。

昨日メールで送られてきた時間にその場所で!!

もうすぐコウが来るのだ。すでに待ち合わせ時間まで5分。刻々と時間が刻まれる。

「あ、トモヤ!!」

やってきたのは、小柄で可愛い美形君だった。
下手すりゃ、小学生に見えなくもない。

「はじめまして、コウ君。久堂一樹です」

一樹は脳殺スマイルを繰り出した。
それに対し、コウも子どものような無邪気な笑みを浮かべた。これはこれで脳殺ものだった。

互いに握手を交して、さらにコウは秀秋にも握手を求めてきた。

「古賀秀秋です…」

もうどうにでもなりやがれ!!

上辺だけの挨拶を交す。

いい加減にすると、うしろから突き刺さっている視線が怖いのだ。

「よろしく」

一瞬だけ、コウの表情が険しくなったように感じたのは気のせいだろうか？

差し出されたコウの手に、自分の手をかさねる。

しかし、コウの手が触れた瞬間に骨が軋むような痛みを覚えて、反射的にコウの手を振り払った。

「っ…!？」

「ああ!!ごめん!!力入れすぎたかな？」

そう言うとは今度は右手を見せて、と駆け寄ってくる。その時、何かにつまづいたのか、コウの小さな体は俺の方へとバランスを崩した。トモヤの表情が険しくなったのに気付いたが、秀秋にはそんなことを気にしている余裕がなかった。

転んだ表紙に腹部にねじりこまれた拳の痛みと、コウが耳元で囁いた言葉で頭がいっぱいになっていた。

「何…しらんぷりしてんの？秀前……」

偽物と本物

ピンポン・・・

かれこれ、5回目のインターホンになる。しかし、人が出てくる気配は全くない。

「あれ？いないのかなあ・・・」

仕方がない、と司はポケットをあさくり、秀秋にこっそりと造ってあった合鍵を取り出した。鍵をあけて、部屋に入る。

その一連の行動に、遠慮などというものは一切存在してなかった。

寝室を覗いてみるものの、ベッドはも抜けのからで、体温の余韻すら感じない・・・ということは、いくら前に起きて出かけたのだろうと、司は推測する。

「ちえ、寝顔の一つでも撮って一儲けしたかったのにな」

首に常備していたデジタルカメラを鞆の中にいれて、ベッドの横に配置してある勉強机へと目をおとした。

長年と使っている木製のその机には、幼い頃に3人でした文字とも絵とも分らないような落書きが未だに残っている。

いい加減に消せばいいのに・・・と思いながらも、なつかしそうに司はそれを指でなぞった。

その頃の情景が頭に浮かび、思わず笑みが溢れる。

——ふと、壁側の机の端の落書きが目についた。

「く…？くう、や…かな？これ。あと、しゅうぜん？…ああ、しゅうぜん…かな？」

妙に歪んだその文字は、落書きの中でも、唯一読めるものだった。

「くうやとしゅうぜん？」

「ヒデアキつ！…！」

バン…！と勢いよく開け放たれたドアから入ってきたのは、息を切らせた空だった。その大きな声は、一人部屋の小さな部屋にはよく響く。

空は、あまりの暇さに耐えきれなくなり、秀秋の部屋に遊びにきていた。

しかし、部屋には秀秋の姿は見当たらず、なぜか頭を抱えるように蹲っている司がいた。

「え…ちよ、司っ！…？」

慌てて空は司にかけより、司をベッドへと寝かせた。ベッドに沈んだ司は、その顔を歪ませて頭をおさえている。

「あ…空？ヒデちゃん、ね…出かけたみたい…」

「そんなことはいって…！…どうしたんだ？」

司の額に自分の額を合わせて、熱をみる。しかし熱はないらしく、

大した体温は感じられなかった。

「ちよつ、とね…。頭痛と目眩が…。でも、もう平気だから」

そう言つて起き上がろうとする司を、空は強制的に司を再び寝かせた。

「いいて!!寝てろよ!!」

空はそう言つて司に毛布を乱暴に被せた。ボフィン、と肩まで毛布をかけられた司はしぶしぶと空に従う。

「ん？なんだ、これ」

薬と水を持つてきた空は、木製の机をなぞる。
そこには歪んだ文字が書かれていた。

「きつたねえ字だなあ、読めない…」

「あはは、そうだね。本当に…汚い字だなあ…」

瞳を瞑つたまま、司は呟いた。

「……………司？」

「ねえ、空…」

呟いた司に、そらは少しだけ違和感を感じた。
しかし、それはすぐに司によって消される。

「それね…空也と秀前って読むんだあ」

「くうや？しゅうぜん」

聞いたことない名前だなあ…と空は首を捻った。

そんな風変わりな名前の知り合いはいないと踏んでいたせいか、たいていして考え込むこともない。

そんな空を見て、司は天井に向かって手を伸ばした。そして、誰にも聞き取れないような小さな声で呟いた。

『ソラのなかには、兄上はいないんだね……』

その声はすぐに、窓からの迷い風にかき消されたのだった…。

「じゃ、ちよっくら飲み物買ってくるわ」

秀秋たちは、とあるゲームセンターへ来ていた。

遊びと言っても、これといったプランを立てていたわけでもなく、適当に面白そうなのを見つけたらそれをやるというのが3人の流儀だった。

そして今回も、その流儀に従い、面白そうなのを求めて街を歩いていると一樹がゲームセンターを見つけたのだ。そしてそれが4人の興味をさそったのだった。

2人で協力してプレイするものもあれば、対戦ゲームや個人でやるやつもある。4人は飽きることも知らず、ゲームセンター内を走り回っていた。

そして、トモヤvs一樹でホッケーゲームをしていた2人は意外にも熱中してしまい、ゲームが終わる頃には息を切らせて汗をたらしていた。

あまりの暑さに二人は飲み物を買いにいってしまい……秀秋は今に至る。

「……………」

「……………」

二人つきりという嫌な展開に、秀秋はコウから少し離れてイスに座っていた。しかし、その態度が気に入らないのかコウは不機嫌そうに顔を歪めていた。

そしてわざとらしく離れている秀秋に徐々に距離をつめていった。

「お前さあ……」

距離をつめてくにつれて離れていく秀秋にコウは溜め息をつく。

「その露骨さ…どうにかなんないわけ？」

ああ、やっぱり…と秀秋は思った。

コウはトモヤと一樹の前では猫を被っていたのだ。無邪気で素直な可愛らしい少年を演じていたヤツとは思えないほど、秀秋の前では性格が一転していた。

「はあ…どーにもなりませんね……」

とりあえず言葉にできたのは、それだけだった。その言葉にコウは苦々しく舌うちをする。

そんなコウを横目に、秀秋は気になったことを述べてみた。

「何で…俺が秀前だと？」

その質問に、コウは目を丸くしていた。

「はあ？お前、まんま秀前の顔じゃなか…!」

「ああ、質問が悪かった。じゃなくて、何で記憶持ってるの？お前も夢…とか見たわけ？」

それを聞いたコウはワケが分からないとでも言うように、首を傾げた。

「夢？なんだそれ。記憶あるか…ってそりゃ、俺がコウだから」

それこそ秀秋には理解することができなかった。顔をしかめていると、コウは何かを察したようにニヤリと笑った。

「お前…もしかして偽物？」

「にせ…もの…？」

「お前の知ってるのってまさか、夢で秀前とかが出てきたりしたからか？」

「え？あ、ああ…」

「なあんだ…」

真実を述べられ、秀秋は曖昧に頷く。するとコウは何か落胆したように、そんな声を出した。

「なんだよ、偽物が…。つまんねえ」

二セモノ……

「俺が偽物だったら、お前はなんだよ」

俺が偽物？

じゃあ…本物ってなんだよ…。

秀秋は泣きそうになっていた。偽物だと言われて、それは自分自身の存在を否定されたような感覚に陥っていた。

「俺？俺は本物だよ」

トン、と自分の親指でコウは自信を指した。

「…本物って…なんだよ」

感情を抑え込む。そうしなければ、コウに手を出してしまうような恐れがあった。

握り締めた拳を震わせて、秀秋はじつとコウの言葉をまった。

「俺は初めから記憶がある。俺はコウ自身であって、自分自身の生まれ変わりなんだ」

秀秋は不安に押された。

コウの言葉は容赦なく、秀秋の心に突き刺さっていく。

「アンタは秀前の記憶を自分のものと勘違いしているだけ。実際は過去を知ってるだけの他人」

——つまり、偽物なんだよ…。

ブラックコーヒー

「——…っ!」

「ん?」

「ヒデ!…ボートしてるぞ」

「ああ…わり」

トモヤに声をかけられ、思考が回復。

気が付けば、回りの景色はガチャガチャと騒がしかったゲームセンターではなく、実家の近くにある川沿いを歩いていた。時は夕刻を指し、オレンジ色の夕日は山の向こうへ沈みかけている。そして川沿いを歩いているのはいつもの3人。いつの間にかコウの姿はなくなっていた。

「あれ…こ、星野は?」

クセで呼び捨てしそうになり、慌てて言い替えた。

「とつくに帰っただろ? お前、俺たちがジュース買いに行った時から変だぞ? 何かコウに言われたのか?」

——お前、ニセモノ。

秀秋はコウに言われた言葉を思い出していた。

「偽物…か」

「は？偽物？」

秀秋はそれ以上、話そうとはしなかった。うつ向いて、トモヤとも目を合わそうともせず、にだんまりと歩く。

そんな二人の様子を見ながら、一樹は首を傾げていた。

「ヒデは偽物なの？」

「そんなの…」

俺にだって分かんねえよ…。

自分が偽物じゃないと断言できないのが悔しかった。コウは本物で自分が偽物だったということを知って、悔しかった。

「……………」

「んーじゃあさ、今ここにいるヒデはどっち？本物？偽物？」

「……………本物、かな」

自分は秀前ではなくても、秀秋であるのには変わりはない。それだけはハッキリと断言できた。

「じゃ、今日俺らと遊んだヒデも本物だってことだろ？秀秋は秀秋で……………偽物とか本物とかあるの？」

秀秋はその言葉に目を丸くして驚いていた。

一樹の言葉は、小さな子供のような意見だったが、今の秀秋を立ちなおさせるには十分な言葉だった。

トモヤは小さく微笑むと、秀秋と一樹の肩に腕を回す。

「そうだな。今、俺と肩を組んでいるのは秀秋と一樹。他の誰でもねえよ」

トモヤは秀秋にいい聞かせるように呟く。

「そっか…そうだな」

ガシツと肩を組み合うと、3人は川沿いを再び歩き始めた。

秀秋は嬉しそうに微笑んでいた……。…。

ウッウッウッ…

携帯が窻のような音をたてて、ポケットの中で震えた。部屋で漫画を読んでいた秀秋はそれを中断し、ポケットから携帯を取りだしディスプレイに目をおとした。

「……………」

秀秋は驚きに言葉を失う。

ディスプレイには、【コウ】の2文字が表示されていた。
ピツとボタンを押して、軽く耳にそれを押し当てる。

「あ、秀前？俺コウだけど」

それは紛れもない、コウの声だった――…。

S H Rの終りを告げる鐘が鳴る。

秀秋は鐘とほぼ同時に教室を飛び出していった。

「…どうしたんだ？秀秋のヤツ」

「さあ？」

分からない、と言うようにトモヤは肩をすくめた。

まだS H Rの終わりの挨拶もすまされていなかった。担任は秀秋の行動に動揺しながらも

「解散！」といい放つ。それを合図に呆然としていた生徒たちも、それぞれ動き出した。

秀秋は昨日の待ち合わせ場所へと向かっていた。

『明日、今日と同じ場所に5時ね』

と、一方的に言って電話を切られてしまい、行かないわけにもいかず、秀秋は必死になって走っていた。

コウが指定した時間よりも、今の時刻は遅いのだ。

しかし、待ち合わせ場所に5時03分に着いたが、そこにはコウの姿は見当たらない。

キョロキョロと辺りを見渡してみると、案外あっさり見つかった。制服を着た女子高生3人が、コウを囲むようにしてはなしていた。いや、正しくは女子高生たちが一方的に話しかけている。

その姿は、目立って見付けやすかったのだ。

女子高生の後ろから、コウの姿を捕えようと覗きこんでみる。

猫被りが解かれそうなほどにイライラしている様子のコウ。そんなことにも気付かずに、女の子たちは構わず話し続けている。

「ねー、待ち合わせなんてほっといて私たちと遊ぼうよお」

「もしかして彼女とか？ だったら私に乗りかえない？」

あゝ…残念ながらコイツには彼女はいなくても、彼氏はいますからね。しかも、君らじゃ、そいつの性格に釣り合えませんよ。いや、きつと。

実際に声には出さず、哀れんだようにコウを見ていると、やっと秀秋の存在に気付いたコウは顔を秀秋に向けた。

しかも、その瞳には怒気が含まれている。遅刻に対して怒っているのか、助けないことに怒っているのか、秀秋には判断できなかった。とりあえず、これ以上コウの怒りを買わないためにも秀秋はコウを助けることが賢明だと判断した。

「……………」

なんて助ければいいんだ？

秀秋には女の子のあしらいかたが分からない。一人悶々と悩んでいると、痺を切らしたコウが最後の手段に出た。

「もー遅いよオ！デートの時間が短くなっちゃうじゃん」

濡れた瞳で見上げられ、思わず条件反射で身を引こうとするが、腕がガツシリと捕まれている、離れようにも離れられない。さらにコウは口パクで何かを伝えようとしていた。

『はなしをあわせろ』

「あ、ああ。悪かったな。じゃあ行こうか」

明らかに棒読みだが、女の子たちは気にした様子も見せず、どんどん近付いてきたあげく、腕をガツシリと捕まれた。

「『私たちもお供しますっ！！！』」

語尾にハートマークがついていそうなその言葉に、秀秋は笑顔を引きつらせる。コウから秀秋に乗りかえた女の子たちは根強く絡んできた。秀秋もコウもこれ以上どうすることもできないと腹をくくり、結局二手に別れて女の子たちをまいた。

携帯で連絡をとりながら、喫茶店で落ち合うことになった。

「デメエ、おせえんだよ！！！」

一番最初に言われた言葉が罵声のそれで、秀秋は仕方なくそれをお

となしく聞いていた。ようやく気分が落ち着いたので注文していた
ブラックコーヒーの意味もなくなき混ぜる。

「さて…何から話そうか」

昔と変わらない鬼畜な微笑みに秀秋は苦笑いを浮かべた。

心配事

「てゆうーかお前、昨日の事チクったな」

何かを思い出したかのように、コーヒーを混ぜていた手を止めて、コウは鋭い視線を秀秋に向けた。

昨日の事…？

秀秋は何のことか分からず、顔を歪める。頭をフル回転させて、昨日のことを思いだし始めた。

——オマエ…偽物。

「あ——…、ね」

アレのことか？

「テメエのせいでトモヤにすっげえ怒られたんだからな！！」「コウ！お前秀秋に何いったんだー！」って！すげー怖かったんだからな！？携帯から怒声が飛んできてさ…」

トモヤが電話しながら怒っている様子は、容易に想像できた。幼いころから一緒だった俺たちは、もちろん、絆も深い。その中でもトモヤは凄く友達想いのいいヤツだ。俺や一樹に何かあった時は、当然の本人よりも考え込んでいる。

秀秋は思わず笑った。しかし、小さく笑ったのにも関わらず、コウはそれを見逃さなかった。

「笑ったな！？クソ」…こっちは本気で口聞いてもらえなくなるとこだったんだぞ！」

若干涙目になりながらも、秀秋をにらんでくるコウを見て、秀秋は余計に笑いを堪えるのに苦労した。過去のコウよりも、今のコウの方が子供っぽく感じていた。

「何だよ…トモヤが落ち込んできるとか言ってたから謝ってやろうと思っただのにさ…。全然元気じゃんか」

ボソッとコウは呟く。

「へ？何か言ったか？」

しかし、声が小さすぎて向かい側に座っていた秀秋に声が届くことはなかった。コウは「別に！」とそっぽを向く。

秀前はコウを苦手としていた。

だから秀秋も当然かのように、コウに対して苦手意識を少なからずもっていたが、今となってはコウの性格は結構好ましいものだった。

「ま、コウの言葉で気付いたこともあったからかも知れないけどな…」

「は？」

今までの秀秋は、無意識のうちに自分自身を秀前に重ねてしまっていたのだ。

秀前が嫌いなものは秀秋も嫌い。秀前が好きなものは秀秋も好き。それが普通になってしまっていた。

そんな自分自身に気付けたのもコウのおかげだと秀秋は思っていたのだ。

「ありがとな」

「な、なんだよいきなり…」

「イヤ…まあ、コツチの話」

「…ワケわかんねえ」

2人はたわいもない話をした。

過去のこと。

現在の暮らしのこと。

トモヤの話も…。

「そいえば、トモヤが面白いこと聞かせてくれたぞ！」

ニヤリ、とコウは笑う。

何となく、嫌な予感がした。嫌な予感ではしたが、おもしろい話を聞く？聞かない？と訊かれたら、聞くと答えるのが普通で…秀秋には「聞かない」と言うことは無理だった。

「ど…どんな？」

ドキドキしながらも訊いてみると、コウはコホンとひとつ咳払いを

してトモヤの口調をマネ始めた。

―回想―

『そういえば、コウ。前にさ俺の親友の話したことあったよな』

それは週末デート（もとい遊び）の帰り道。トモヤは突然そんなことを言い出した。

『ん、ああ。ヒデアキとイツキだろ？』

トモヤの学校の話を書くときに必ずといっていいほど出てきていた名前だ。2人にいるときも、トモヤが楽しそうにその2人のことを話すもんだから、コウは少しその親友とやらの嫉妬の念を抱いていた。

『そう、そいつら！ヒデアキのほうなんだけど、アイツ子供の時さ、変なこと言ってたんだよ』

ニコニコしながら話すトモヤに、ちょっとムツとする。

『変なこと？』

しかし、嫉妬なんてカッコ悪いと思っていたコウは平然を装う。ぶっきらぼうに聞き返すとトモヤは話を続ける。

『まだ幼稚園に通ってたころさ、俺に向かって言うんだよ。「ねえ、

空也は？」「ってさ」

『！？』

『そいつ弟いて、空っていうんだけど」「空じゃないのか？」「って聞いたらさアイツ…』

『トモヤ！』

『な、なんだ？』

トモヤの言葉を遮り、コウは叫んだ。突然のその声に、トモヤは戸惑いを隠せない。

『俺、その2人と遊びたい！』

『…へ？』

——回想終了——

「ってね」

「っ……」

コウの回想のなかには、なぜいきなり秀秋たちとコウが遊ぶことになったかという過程と、秀秋の中では、すでに消し去った思い出が入っていた。

あの頃の秀秋は幼いせいか、夢の中と現実を区別することが難しく、現実世界でも空也を探し求めたりしてしまっていたのだ。もちろん、空が空也だとも知らずに…。

「クソトモヤめ…」

余計な事を…っ！

「ま、おかげでお前を見つけたってわけ」

なぜか得意気に鼻を高々とするコウを見て秀秋はため息をついた。自慢じゃないが、トモヤと一樹は産まれたときからの付き合いだ。一樹しか知らないこともあれば、トモヤしか知らないこともある。そして、そのトモヤとコウが付き合うとなれば、うっかりとトモヤが言っではいけないことを口にしてしまいそうで、心配で仕方がなかった。

コウは上機嫌に、秀秋は暗い面持ちでコーヒーを口へ運ぶ。

「兄貴!？」

突然、聞き覚えのありすぎる声がキーンと右耳から左耳へと声が突き通った。誰の呪いかは知らないが、どうやら今日は厄日らしい。

嫌々ながらも声のした方へ振り返ると、満面笑顔を浮かべている可愛げな小顔があった。しかし、秀秋はその顔が見えた途端、顔をグリンと元へ戻す。

できれば今会いたくない人物だった。

「空…」

直感

「なんで此処に…」

一人で苦悩していると、いつの間にやら空は秀秋の隣に座っていた。いつの間に！と驚いている秀秋に比べて空はウェイターに注文をしてから一緒にいた友達らしきヤツらに笑顔で手をふっていた。

一方コウはというと、目を丸くしながら空をジッと見つめている。その視線に気が付いた空は「よう！」と、初対面なのにも関わらず人懐っこい微笑みでコウに挨拶をしている。それを聞いた途端、コウが嬉しそうに瞳を輝かせた。

「もしかして…空也？」

「いゝ！？」

叫ぶように言ったコウの言葉に秀秋は思わず変な声をあげた。

「へ？いや、俺、空だけど？」

突然のコウの発言に、空は首を傾げる。

「いやーまさか空に会えるとは思わなかったよ！もしかして運命ってヤツ？」

興奮気味にコウは握った空の手をブンブンと握手…というよりは振り回していると言ったかんじだった。空は戸惑いを隠せないように、コウに対して苦笑いを浮かべると、秀秋に視線をうつした。

「この人…誰？」

流石の空も困っているのか、珍しくその笑顔は引きつっていた。

「えー！？ 忘れるとかヒドくないっ？ 俺だよ、コウだよ？」

「コウ…ちょっと」

秀秋はコウが暴走しないうちに事情を説明することにした。空にはトイレと言って二人とも席を外す。席を立ててすぐ、空に視線を向けたが空は気にしている様子もなく注文したジャンボチョコパフェを口に頬張って「いっふえらっふあゝい」と右手に持ったスプーンを左右にふっていた。

ほっと一息、溜め息をつくとき秀秋はコウに事情を説明した。

——かくかくしかじか。

「へ？ 記憶がない？」

コウの問いに対して、秀秋は小さく首を縦に振る。信じられない、とても言うようにコウの表情は青ざめていた。というよりも、秀秋はコウの驚きぶりに首を傾げていた。

「なあ、お前…もしかして生まれ変わりはみんな記憶がある、なんて思っていないよなあ？」

「は？ 違うのか？」

やはり…。

おかしいと思っていったんだ。会ってすぐに記憶が本当にあるかも分からないのに、ブローはないと思う…。あれは痛かった…。いや、苦しかった。

秀秋は呆れたように溜め息をつく。

「前世は前世。今は今。そんなに前世の記憶もってるヤツがいたら紛らわしいだろ？てゆうか、トモヤにだって前世の記憶がないことくらい分かったろ？」

「……トモヤ？」

なぜそこでトモヤが出てくるんだ、といぶかしげな目で秀秋を見る。

「まさかトモヤがゴンゼ…ってこと知らないんじゃない？」

正しくはゴンゼの生まれ変わり。

コウは記憶をたどるようにゴンゼの名前を連呼する。やっと分かったのか、コウは「えーっ！！」と声を張り上げた。狭いトイレに響くには十分過ぎるほど大声だ。

「ゴゴゴゴゴ、ゴンゼってあの！？副将きどってたオッサン！！！！？」

どうやら、コウの中のトモヤ像が少しだけ崩れたような音がしたように思えた。その顔はショックを隠しきれないようだ。

「ま、そーいうことだから」

トイレから戻ってみると、空はすでにパフェを食べ終わっていて暇そうに足をブラブラとしていた。

「遅かったな」

秀秋とコウに気付いた空は不満そうな顔で秀秋をにらんでいた。

「悪いな。意外に混んだ」

秀秋は苦笑いでごまかす。

……って何で俺が謝るんだ！？空が勝手に席移動してきただけなのに！！

「空くん、だっけ？ゴメンねさっきは。知ってる人とあまりに似てたからさ」

「別に気にしてないぞ？コウ…君？あれ？なんか君付けって呼びにくいな…コウでいい？」

「ハハ、いゝよ。俺も空って呼ぶからさ」

互いの名前を呼び合い、笑いあう。

うゝむ…。こいつらだけ見ると本当に中学生に見えるぞ…。

秀秋は余計なことを考えていた。

「そーいえば空也ってさ…」

「「！」」

まさか、空からその名前を聞くとは思ってもいなかった二人は驚いて空に視線を注ぐ。

「ヒデ兄とも知り合いだったりする？」

「ん、ああ…まあ、な」

あいまいな返事に空は「やっぱり」と呟いた。なんで？と聞く前にコウが先に口を開く。

「空も知ってるの？」

「いや…知ってる、つか名前だけ？ヒデの机に落書きされてたから」

落書き…？

そんなものを書いた記憶がなかった。ただ、幼すぎて忘れてるだけ

かもしれないが…。

コウは面食らったように隣でクスクスと笑っている。

「空也…としゅう、ぜん？かな…二人書いてた」

それだけを言い残し、空は友達に呼ばれてそのまま店から出ていった。

秀秋の心臓は頭まで届きそうな音で脈打っていた。胸に手を当ててギュー…っとシャツを握り潰すかのようにおさえつけていた。

一時の沈黙が流れ、気まずそうにコウが口を開く。

「あの…さ…」

何かを躊躇っている様子だった。嫌な予感がする。しかし、体は金縛りのように動きはしない。

「さっき…空也に会って思い出したんだけど…」

この先は聞いたらダメのような気がする。それは直感のようなものだった。

「空也を殺したやつ…」

ダメだ…っ！！

頭はそう命令を下しているのに体は従おうとはしない。心臓はドクドクと高鳴る。

嬉しい、悲しい、憎悪、幸福感、嫌悪感…。

いろんな感情が入り混じって、時が流れるのを早く、と待っている
かのようだ。

「俺…なんだよね…」

その瞬間、それらは身体中を駆け巡り、膨張していく。

膨らんで膨らんで、パンツ！と何かが弾けたような感覚に襲われ、
俺の意識は途切れた——…。

悲痛

「おりゃあああゝ！」

そんな声が響く野原。

空は青くすんでいて、渡り鳥がかけまわる。見渡す限りに広がる緑の草は風に揺れて、ざわわ…と音をたてていた。

そんな原っぱの中心に木刀をもった3人の少年たちがいた。一人は黒髪で木刀を片手に、向かってくる少年の木刀を適当にあしらっている。そして、そんな少年に向かっていつているのが、コウという名の少年だった。

コウは木刀を構えない空也に向かって突進する。が、ひらりと避けられてしまい先ほどからしょうぶになっていなかった。

「おい空也！ちゃんと勝負しろよ！」

そんな空也の態度が気に入らずコウは怒りを爆発させる。

空也は露骨に嫌そうな表情を浮かべて、木刀を右から左へ持ち直す。

「だつて勝負、見えてんじゃん…」

ため息をついてコウに背を向けると、二人の勝負を見守っていた秀前の方へ歩き出した。

「シュウ、交代」

片手をあげた空也につられて秀前も片手をあげて、パン！と手を合

わせた。

「え……、ええ!!!?」

やつのことで何を言われたか理解した秀前はすでに原っぱに座り込んでしまった空也を見返した。コウはますます空也に怒りを覚える。

「おい空也！逃げるのか!？」

わざと挑発するようにコウは問う。その言葉に負けず嫌いの空也もピクリと反応する。しかし、木刀を握ろうとはせずに横に倒したままだった。

「勘違いすんなよ」

「…勘違い？」

「強さで言ったら、俺、シュウ、お前の順だけど、稽古だったらシユウの方が強いんだ。お前は強いヤツとやりたいんだろ？」

「ま、まあな」

コウは「逃げたな…」と思ったが、正論なので言い返すことができなかった。

コウだって10歳の若さにして大人相手に互角に戦えるのだ。稽古をつけている先生にさえ負けない。

しかし、空也と秀前とでは比にさえならない。

武士たちでさえ、10歳の空也たちに一目おいているのだ。

「空也、何を勝手に決めてんだよ」

泣き言を言う秀前。

本当かよ、と疑いながらも稽古をしてみる。

と、コウはあっさりと負けてしまっていた。勝負が始まった途端に秀前の目付きが変わり、すばい動きに惑わされていつの間にか一本をとられていた。

しかも秀前は完全に一本入るハズなのに寸止め。

なぜ？と聞くと、曖昧に笑い困ったように「んゝ…痛そうだから」と言われ、それもまたコウの敗北感を倍増させていた。

「ほらな」

「もう一回っ！！」

空也に馬鹿にしたように笑われ、コウは再び秀前に再戦を申し込んだ。

悔し涙を浮かべながら、キツと秀前を睨む。

それを見ていた空也は腹を抱えて笑いだした。秀前も困ったように苦笑いを浮かべる。

幼い頃はなんだかんだと3人は仲良しで、兄弟のように毎日遊んで暮らしていた…。

そして月日は流れ、見方同士の喧嘩が亀裂をいれて、コウは空也たちと離れ離れになった。

コウは17歳をむかえ、その年の冬――…。

大きな戦乱が起こった。

「はあ…」

コウは大きくため息をついた。

かれこれ1時間。敵軍に幼馴染みだった空也と秀前がいるという情報を知り、ずっと戦場を走り回っていた。嬉しくて、道塞ぐものがあれば敵でも味方でも切り捨てる。しかし、進めど進めど、懐かしい顔らしきものは見つからず、走り回っていた消費してしまった体力を回復させようと森林の中で一人、丸太に腰かけていた。

（どこだよ…。空也、秀前…）

どんよりと暗い空を見上げると、見事な満月が戦場を照らす。あちこちから声が飛び交う。

「そろそろ行くか…」

よいしょ、と重たい装備をつけた体を持ち上げるように足に力を入れる。と、その時、ガサツと茂みが動くような音にコウは振り向き構えた。

そこには味方が敵か判断できないほどの重傷を負った青年がいた。頭に被っているカブトでかろうじて味方だと判断できる。

「た…助けてくれ…」

かすれたような声でそれだけを言うと、その青年はその場に倒れる。コウはその青年の首元に手を当てて死んだことを確認した。男の手に目を落とすと、その手にはヤリが握られている。死後硬直してしまったその手からそれを取るのには苦労したがなんとか手首を切り落とすことなく、取ることができた。

試しにそれを構えて、そこら辺に立っている木を突いてみる。風を切るような音と、ドスツという音が聞こえた。

「おお！」

これは使える、とコウは腰に差していた刀を投げ捨てヤリを片手に装備を直した。

鉄で出来ている刀なんかよりもずっと軽く動きやすい。リーチも長いから、小柄なコウにとって、それはとても扱いやすいモノだった。コウはヤリを片手に森を飛び出すと、一番騒がしそうな場所へと走り出した。

戦場へ出てみれば、既にそこは血の海と化していた。

死体の多くは味方の兵たちで、敵兵はそれに比べてずっと少ない。辺りを見渡し、敵軍を見付ける。

復讐などとはかんがえていないが、鼻をつく血生臭さがコウの闘気をあげてしまっていたのだ。

――弱イヤツハ死ヌ。

――強イヤツハ生き残ル。

コウは戦場の雰囲気酔って、我を忘れていた。

なんの迷いもなく、敵軍へと突進。

その時だった…。

コウは自分の目を疑った。

一瞬、幻ではないかと目を擦った。

敵軍の先頭に立つものは、コウのよく知っている人物で…。それは幼いあの頃から、さして変わらぬ子供のような顔。

「空也あああつ!!!」

久しぶりの対面は殺しあいの場所。

ずっとずっと、この時を待ち構えていた。

幼い頃から一度たりとも勝ちを譲りはしなかった空也。今度こそ、と思いながらその名を叫び突進する。

『勝つて、ぜつたいに俺をみとめさせてやるんだからな!』

その想いはあの頃と変わらない。

あと3mもない間合いを詰めた時、空也は小さな背中をコウに向ける。

「まだ俺を愚弄する気かつ!」

怒りに燃えるコウ。

構えたリーチの長いヤリをそのまま、空也の背に突き刺す。

(さあ、悲鳴をあげるか?)

あげればいい。

俺を認める。

しかし、空也は痛みに顔を歪ませることはあっても、悲鳴をあげるなどということはしなかった。最初から空也の視界にはコウなど入っていなかった。

「秀前つ!」

悲痛に歪めさせたその表情はひどく場違いで、空也はその言葉を最後にゆっくりと倒れる。

——なんて馬鹿なことをしたんだろう…。

そう思ったときは既に時遅し。
コウは愕然と、その光景を見つめ、自分自身を罵った。

暗黒の手

人……っていうものは何て脆いのだろう……。

空也を突き刺したときの槍から伝わってきた肉の感触は今でも鮮明に思い出せる。

いまでは、多くの罪無き者たちの血でドス黒く染まってしまったこの手は、かつて空也、秀前、たくさんの信頼できる仲間たちと共に組んだ手だったのに——…。

「……………秀前？」

とりあえず、全てを話してみたものの、その後の自分は何をしたらいいのかなんてコウは全く考えていなかった。

土下座でもして謝るべきなんだろうか……。

とてもそんなもので償える罪だとは思ってもいないが。

「じゃなかった……。今の名前は秀秋だったな」

無意識に秀前、と昔の名前で呼んでしまっていたことに気づき、訂正をいれる。

しかし、秀前は思いもよらない言葉を発した。

『秀前、だよ。コウ……』

雑音が入り混じるような不思議な声。

それは頭に直接響いてくるような、不気味なボイス。

「……………え？」

コウは反応に困った。

次の瞬間、首筋にヒヤリとした感触が身体中に走る。

秀秋はテーブルに設置されていたフォークをコウの細い首に押し当てていた。その力はどんどん強くなっていく。今の秀秋から感じられるのは憎悪。

冷たい汗が背中を伝う。

「ほ、本当に秀前…？」

確かに、感じが先ほどまでの秀秋とは違っていた。しかし、今感じている気は、コウの知っている以前の幼くて頼りない秀前とも違っている。時はこれほどまでに人格を変えてしまうものなのだろうか…。

フォークにさらに強い力が込められた。途端、コウの首から冷たい感触は消えた。

「……………？」

コウの首から離れたフォークを持てあそぶ秀秋に、コウは戸惑う。先端を指でつついたり、軽くふつてみたりと、コウには意味不明な行動としてしかその目には映らなかった。

『これでは…殺せないな』

「！」

無表情にコウを見つめる秀秋：もとい秀前のその瞳には光がない。虚ろな目で、何かを隠しているような、そんな感じがする。

そしてそのまま手を伸ばすと秀前はその手をコウの首にあてる。

「ぐっ……………」

息苦しさが肺を圧迫し、口から苦しげな声がもれる。秀前は右手に力をいれて、コウの首を絞めていた。

「やめ…ろ、秀ぜ…」

ドタッ…

そんな音と共に息苦しさがなくなり、秀前の体から力が抜けたように、テーブルに伏せるようにして倒れた。よくよく見てみれば、秀前の隣には人影があり、その拳は見事腹部にねじこまれていた。

「ったく…」

ふう、と一仕事終えたようなため息をもらしたのは空也もとい空だった。

コウは状況についていけずにただ空を見つめる。一方空は、心配そうに秀秋をつついたりとしていた。

「…力、いれすぎた？」

全く動かない秀秋を心配しつつも、呼吸を確認すると安堵のため息

をついてコウに目を向ける。

「場所…移動しようか」

その姿にコウは、空也の面影を見た気がした――…。

二人で秀秋の体を引きずりやって来たのは、個室のある居酒屋だった。

畳の敷いてある個室に秀秋を寝かせるようにすると、コウと空は向かい合わせに席に座る。沈黙が流れるなか、空はポケットに入っていた音楽プレーヤーを取り出してイヤホンを片耳だけにセットする。

「なんで片耳だけ？」

沈黙をどうにかしようと、焦って口からでた言葉がそれだった。

「ん、ああ。だって話できないだろ？」

そう言うと、空は人懐っこい笑みを浮かべた。そんな空の表情にコウはドキリとする。

「やっぱ…そっくり」

「え？」

「あーいや、さっき話してただろ？空に似たやつがいるって…」

無意識のうちに呟いてしまっていた言葉を誤魔化すように弁解する。確かに似ているのだ。

まあ、生まれ変わりなのだから当たり前かもしれないけど、トモヤとか例外もいるのだ。

あの頃の鬼畜なオーラは感じられないものの、時々見せる空也の微笑みと空の笑い方はコウの脳裏でびったりと一致していた。よくよく見れば、仕草や癖もあのときのまま。

漆黒の髪と瞳はどこまでも澄んでいるようで、昔はよく空也の髪をいじらせてもらっていたものだ。

「そいや、さっきごめんな。移動しないとスッゲ視線集めてたからさ」

「あ、いや。コッチは助けてもらったんだし。ありがとな」

さっきまでいた喫茶店では、店中の客プラス店員までの視線をすべて集めてしまっていたから、コウとしてはありがたかった。

まあ、あの騒動だけの問題じゃないと思うが。

女性客プラス女性店員は色目でこちらをみてきていたから。

自分も美形と言われる方だが、この二人と比べると、とてつもなく地味な顔付きに見えてくる。昔から人並み以上の才能を持つのは運命みたいなものなのだろうか？

そんなことを思いながら、コウは一人微笑んだ。

「あ、あと秀秋が傷つけちゃってるな。首大丈夫？」

「平気平気。浅いし、俺の自業自得みたいなもんだから」

首には赤い血の跡と、手の跡が残っている。

でも、そう。

これは自業自得なのだ。

空はもちろん、秀秋も悪くない。秀前も、だ。

悪いのは全て俺。

「だからさ、気にしないでよ。これから仲良くしたいからさ」

若干、上目使いで空を見ると驚いたように目を丸くしていたが、それはすぐに笑顔に変わり「俺もだよ」といつてくれた。

「よろしくな！」

手をさしのべられて、コウはその手を握ろうと手を伸ばしたが反射的に手を引っ込めた。びくつ、と体が震えて表情が険しくなる。

「…？どうした？」

空が不思議そうに首を傾げる。その手はさしのべられたまま。

「あ…今、手…汚れてるから……」

コウは言い訳をつくり、目線をそらす。空は納得したのかそのまま

手を引つ込めて笑った。

それから二人はたわいもない会話をした。空が本当に楽しそうに話をしているのを見て、コウは心が締め付けられるような感覚に捕われていた。

コウは空に見えないテーブルの下で、痣ができるほどに自分の腕を力強く握っていた。

血に染まった手で空に触れてはいけないと思った。

俺にはもう、空也の手を取る資格なんてないんだから――…。

古賀流体式術第伍の術【碎破】

「う……っ……！」

目が覚めた途端、腹部に感じる激しい痛みで秀秋は一瞬で眠気を吹き飛ばしていた。一番始めに視界に入ったモノは天井と思われる白い壁。保健室…とも思ったが、そのわりには薬品の香りが漂っていない。

一体此処はどこだ？

と思考を回復するなかで記憶を辿っていく。

そういえば、コウと喫茶店に行って、空が来て、帰って……アレ？定かではない記憶が秀秋の頭の中でまわる。

記憶を辿るのをあきらめ、重たく感じる自分の体を起こそうとするが、金縛りのように指先でさえ動かない。

「うーん…やっぱ力入れすぎだったかなあ？全然起きねえよ」

体を何とか動かそうと踏ん張るが、本当にビクとも動かない。仕方がなく（寝たまま目を開けているのは非常に怖いので）目を閉じた。どんどん人の気配は近付いてくる。

「大丈夫じゃない？そんなに時間経ってないし…」

コウ！！？

…っていうか、アレ？空って帰ったんじゃないか？たっけ？なんで二人一緒なんだ？？

クエスチョンマークを頭の中に何個も何個も浮かべていた秀秋は、金縛りは勢いをつければ抜けることができるとテレビで言っていたことを思い出した。

ゆっくり深呼吸をして、起き上がろうとした時、秀秋はとんでもないことを聞いてしまった。

「あつ、そうだ！！機械みたいに叩いたらなおるんじゃないかね？そんな名言あったよな！壊れたものは叩いて直せってさ」

嬉々を含んだ空の声が、名案！とでも言わんばかりに叫ぶ。

「あつ、そうだ！」じゃねえよ！！人間と機械が一緒なわけねえだろうが！！しかも名言なんかじゃねえ！！
思わず秀秋は心の中で怒声をあげる。

「グッドアイデア！！」

ちょっと…待て、コラ。

どこがグッド？バッドじゃないの？ねえ…。

「じゃ、せーので！」

「よっし！！せー…」

「やめろ——っ！！」

生命の危機を感じた秀秋は無意識に体を勢いよく起き上がらせた。

「あ、起きれ…ぐはっ！！！！」

起きることはできたが、空とコウの腕は車と一緒に、急には止まらず腹部に見事ヒットした。再び倒れて激しい痛みをこらえる。

あれ？そういえば何で腹が痛いんだ？

秀秋は先程の空の言葉を思い出していた。

『やっぱ力入れすぎだったかなあ？』

…つまりは何か？叩いて壊れたから叩いて直そうとしたわけか？俺は一度既に叩かれていたと？

秀秋は腹部の痛みに覚えがあつた。

それは空の得意技で、代々（？）古賀家に伝わる秘伝技で鈍いじんわりとした痛みがあとに残るのだ。

小柄な空ならではの技で相手の懐に入り、拳に回転を加えて突く。至って地味な技だが、これがかなり…効くのだ…。

我が家では【古賀流体式術碎破】と呼んでいる。

「空…この腹部の痛みはお前かあ…」

恨めしそくに秀秋は唸る。

「あ…いや、それにはワケが」

「問答無用！！！」

秀秋の手刀がふりおろされ、空の体は力なく倒れたのだった――…。

「さて、と…」

秀秋はパンパンと汚れをはらうように手を鳴らすと、先ほどまで空が座っていたと思われる席に座り、コウと向かい合わせとなった。わずかながら、コウは身を引いて距離をとる。

これでは強さが前世の秀前と空也の立場が逆だ。

「いったい俺は何で此处にいるわけ？」

「え……………」

コウは困っていた。再びあの話を持ち出せば秀前がまた出てきてしまうかもしれない。空が気絶しまっている今、コウ自身には対処しようがない。

それに、できれば知らないほうが良いことなので誤魔化すべきなんだろうが、いい言い訳も思いつかない。

「ま、いいや。どーせ俺が途中で気絶かなんかしたんだろ？」

「あ、うん。そうそう…」

案外あっさりと引き下がり、コウは秀秋の言葉に頷く。実際は気絶

なんかしていないが、本人の記憶がないなら同じことだろう。

「あゝ… やっぱりな。なんか最近記憶が曖昧なことが多いんだよね
あ」

流石に、この間は気がつけば空を組していたなんて言えない。他人に言うことでもないし、第一こんなことを知られたら良からぬ誤解を受けてしまう。

コウは秀秋の言葉にドキリとしていた。きっと秀秋の記憶がない部分は恐らく秀前が表に出てきているのだろう。

「あー!」

秀秋はなにかを思い出したかのように声をあげる。

「な、なに?」

「そーいえば、最後の方の記憶でお前がなにか言おうとしてなかったか?」

「へ?」

あまりに突拍子で、コウの声は裏返る。

コウはその場に応じた言葉を頭フリ回転させて考えた。が、やはりそついうのは苦手分野で頭の中は真っ白。

言葉を探せど探せど何も浮かんでこない。元々、コウは顔に出やすかった。だから嘘が一番苦手なのだ。

もついつそのこと、本当のことを言ってしまうおうか…。

“空也を殺したのは俺なんだ”

…と。

「実は…」

「ふつかああーつつー！」

本当のことを言ってしまうおうと決意した途端、コウの言葉を遮るように空が叫ぶ。驚いて空を見てみると、気絶したままの状態で大の字に両手両足を広げていた。そして勢いをつけて起き上がると、秀秋に指をつきつける。

「このクソヒデー！さっきはよくも…」

いつもの子供っぽくて人懐こい空の声はガラリ変わり、低く唸るように秀秋を睨む。コウはハラハラしながら二人の様子を見ていた。秀秋も立ち上がり、対峙して、そして二人同時にファインディングポーズをとった。

「ふーん？珍しくブラックだな、空君は」

「うるさいっ！！それでも喰らえ！！古賀流体式術第五番…！」

空が言い終わる前に、秀秋は一瞬で空の懐に入り込む。

「お前だけが使えと思うなよ？第五の術【碎破】…！！」

秀秋は空の言葉に続けて拳を思いきり空に打ち付けた。小さなその

体は壁に叩き付けられて、空は

「ぐっ」と短いうめき声と共に再び力尽きた。

空にしか使えなかったハズの第五の術を、秀秋はこっそりと練習し、習得していたのだ。勝ち誇ったように空を見下している秀秋を置いて、コウは巻き込まれないうちに店を抜け出していたのだ——
…。

勇者ごっこ

「昨日は随分と楽しんだようだなあ？ヒデ」

朝、教室についてすぐにトモヤに会った。ドアの前で待ち伏せしていたらしいトモヤに道を妨げられる。

秀秋は引きつった笑みを浮かべて目をそらした。

「な、なぜ…それを」

「なぜ…かつて？」

秀秋は不思議に思う。昨日のことはトモヤに言っていない。もちろんコウにはすでに口止済み。

となれば、昨日のことを知っていて、告げ口しそうなヤツは一人しかいない。

空だ！！！！

あの野郎、まだ昨日のことを根に持ってたのかよ…しつこくやつめ。次に会った時は第3の術喰らわしてやる。

「言つとくケド、空から聞いたわけじゃねえからな」

まるで心の内を詠んだかのようにトモヤは言った。その間も鋭い睨みが秀秋に突き刺さっていた。秀秋はどう説明すればいいか分からずにただ視線を泳がしている。

「黙ってるってコトは…裏切りと取ってもいいわけだな？」

低い声が唸る。

「ち、ちがつ！！」

俺は弁解しようと伏せていた目をあげて呆然としていた。なぜなら、目の前にいるトモヤの表情は無でもなく怒気を含むわけでもなくニツコリと笑っていたからだ。

「なーんてな」

「……………へ？」

おどけた調子のトモヤの発言に、秀秋は首を傾げるばかりで。

そんな秀秋の反応に満足気なトモヤはバンバンと秀秋の肩を叩いた。

「昨日ちようどさ、店から出てきたコウから話を聞いたんだ。空も一緒だったってことも聞いたし、言えない事情があるってこともな」

満面笑顔でトモヤは言った。

「ただお前らが俺なしで遊んだってことに、少し嫉妬しただけだ」

「…つまり…からかったと？」

「そゆこと」

と、言ったのはトモヤではなく一樹だった。今まで気が付かなかったが、窓の前でしゃがみこむように座っていた。

「さあヒデ！！遠慮することはない！やっちまえ！！！」

ふるふると肩を震わせていた秀秋に一樹は叫ぶように言った。一樹の人指し指はトモヤに向けられていた。

「え？」

トモヤは状況が詠めないらしく、戸惑いを隠せないようである。一方、秀秋の中では怒りが渦を巻いていた。

「ちよっ！！？ヒデ、ちよっとしたジョークだろ！？」

構える秀秋にトモヤはなだめるように言うが、それは無駄な行為に過ぎない。秀秋の怒りは治まることを知らず、叫んだ。

「古賀流体式第3の術【零八】！！！！！」

その後、トモヤはその日授業を受けることなく保健室で寝込んでいたという話だが、俺は知らない――…。

「ヒデ兄！！一樹！！…と、あれ？トモヤは？」

廊下で空と遭遇した秀秋。空はいつも一緒にいるトモヤが不在であ

ることに疑問を抱き、キョロキョロと辺りを見渡す。

「話す・戦う・道具・逃げる」

「へ？」

一樹が突然、意味不明な言葉を発し空はさらに首を傾げた。よく見ると、なにやら一樹は楽しそうに、期待のような眼差しで秀秋を見つめていた。そんな一樹に興味なさそうに秀秋は答えた。

「話す。トモは今保健室」

ふーん、と空はどうでも良さそうに相槌をうった。今はそれよりも、興味の惹かれるものを見つけたからだ。

「一樹は何してんの？」

よくぞ聞いてくれました！！と言わんばかりの視線が空に向けられる。

「勇者ごっこ」

「へー…楽しそうだな。でもなんで？」

「気分」

一樹は昔から気分屋だった。
だから空も秀秋も慣れ…というものがあって、イチイチ気にもしていなかった。

「今朝、こいつの悪ノリに付き合っでトモに攻撃したんだよ。したら…今朝からずっとこの調子で…」

はぁ…と深いため息をつく。一方一樹はニコニコとご機嫌な様子だ。

「何言っでんの、攻撃はヒデが自分でしたんだろ。でもさ、第3はやりすぎじゃない？トモヤかわいそ…」

「第3の術！？いつてえ」

顔を青くさせながら空は叫ぶ。第3の術【零八】とは、一点集中攻撃で体の一部のどこかをおもいつきり刺激する。いわゆるツボ押しの強いバージョン。

打ちどころによつては、トモヤみたいに気絶（悶絶？）してしまうことがある。また、ぜんぜんダメージを受けない場合もある。まれに自分がダメージを受けてしまう場合もある。だからあまりやらない。

「だつて…ム力ついたんだよ」

実際、本気で焦っている秀秋に対してトモヤが心の中で笑っていたと思うと、ムカムカと、知らず知らずのうちに拳を握り締めていたりしていた。

そして気付けば、戦闘体制は整っていた。

「で？今からどこ行くの？」

「「保健室」」

「俺もついてこーっと」

「空は仲間にしてほしそうな目で見ています。仲間にしますか？」

一樹は楽しそうにいい、秀秋はキツパリと

「無理！！」と手でバツマークまでつくったりもしたが、それで空が退くハズもなく、勇者パーティーは3人になった。

万能薬

「は？まだ起きてないんですか？」

秀秋は信じられない、とても言うかのように尋ねた。

「ええ。私も一度病院に連れていった方がいいとは思っただけ……」
「……………」

思わず言葉をなくす。

力強すぎたか？いやでも、いつも以上の力はこめてないつもりだった。もしくは打ちどころが悪かった？それは……まあ、否定できないけど……。

秀秋は第5の術を習得している間に、自分の力がましたなどと気付かなかった。

「もつたいないわ。できれば私が彼を診てあげたいのだけれど……」

「いえ、それは遠慮します。下手するとトモが一生起きなくなりま
すから」

保健医もとい魔女の発言をきっぱりと断る秀秋。それに対して保健
医は「失礼ね」と頬を膨らませる。

まだ20代前半のそれは、多くの男心を攪るだろうが、今現在、そ
んなものに心ときめかす人物なんて保健室にはいない。

一樹はそんな二人の様子を見ながらも、トモヤの容態を確かめるべく、ベッドに備え付けられているカーテンをいきおいよく開けた。

「トモヤ、死んでる？」

さも生きてないのが当たり前、という風に一樹はトモヤに話しかけてみるが、当然返事は返ってこない。

「美味しそうよね……」

「……………」

ベッドを覗きながら、保健医は独り言なのか同意を求めているのかも分からないように呟く。それを独り言として受け取った秀秋は、同じようにベッドを除きこみ様子をうかがう。

「返事がない。ただの屍のようだ」

「またかよ……」

「トモヤ死んだの？」

「まだ生きてるよ」

「死んだら私に死体はちょうだいね」

「……聞きたくないですけど、いや聞いても死体はあげませんけど……もらってどうするんですか」

「ホルマリン漬け」

「……………」

「ホルマリン♪ホルマリン♪」

「ほるまり〜ん」

トモヤが寝ている隣で、雑談を試みても起きる様子のないトモヤを見て、秀秋は小さく溜め息をついた。

「しょーがない…か。一樹、道具」

「へ？」

突然の秀秋の振りに、一樹は首を傾げる。

「ほるまり〜ん♪」

「空、うるさい。万能薬だよ、万能薬。絶対トモヤにだけ効き目のある道具」

自作のほるまりんの歌を歌っている空を黙らせて、ニヤリと笑って見せる。それを見た一樹は「ああ！！」と納得して携帯を取り出した。

いくらかの操作をして、それを耳に近付ける。

「……………あ、……………つと、ゴホン。コ、コウ君？今学校なんだけど。あのね、落ち着いて聞いてよ？トモヤが大変なんだ！！このままじゃ…このままじゃ…トモヤ死ん」

ブツッ…

「これでよし!!」

見事な一樹の演技力に、秀秋も空も保健医も拍手を送る。

「流石だな」

「ところで今誰に電話したの？」

「……………」

そんな空の問いに、一樹と俺は顔を見合わせて、小さく微笑む。

「とっておきの万能薬って言っただろ？ところで空…」

「ん？」

空を観察し、体格をアバウトにはかってみる。よし、大丈夫そうだ。

「お前…今日、体育服もってきてるよな？」

「え…あ、うん…？」

一応確認した上で、俺は空に命じた。

「よし、じゃあ…脱げ」

「……………はい？すいませんお兄さん。それはアンタの趣味？」

「んなワケねえだろうが！！！！体育服に着替えろって意味だよ！
」

「なーんだ」

なぜか残念そうに呟き、制服の下にすでに常備していたらしい体育服に着替える。正しくは脱いだただけだな。

制服をたたんで一応コンパクトにし、持ち運びが楽にできるようにする。

「で？それをどうするワケ？」

制服を持ったまま、俺たちは保健医にトモヤを頼み、移動。状況が理解できていない空はずっと首をかしげていた。

「そろそろ…かな」

「だね。5分経ちそう」

「なあ、なんのこ「しゅゝぜゝん！！！！」…と？」

空とヤツの声が重なった。

ぴつたり5分だ。

声が聞こえた方向へ目を向けると、ものすごいスピードで砂埃をたてながら近付いてくる人物がひとり。

まあ、現代で俺のことを『秀前』なんて呼ぶヤツ…アイツしかいないだけだ。

「なんでコウがここに？」

遠くを眺めるように、コウをみている空。こっちはなぜか笑顔だが、向こうは必死の形相だ。

「ああ、お前はまだ知らないのか」

「なにを？」

聞き返してくる空に、一樹は口許に人指し指をたてながら「秘密だよ」と呟いて空の耳元で何かを囁いた。

『コウ君は、トモ君の、コ・イ・ビ・ト』

「……………」

シュバツ！と急ブレーキをかけたコウはピタリと俺たちの前で立ち止まった。

「トモヤは！！？」

慌てたようなその声音に、俺たちは必死に笑いをこらえる。

「ええええええ！！！！？？？？」

ただ空だけが、初めて知った真実に驚きを隠せていないようだった。

「なあなあなあ！！トモヤは！？大丈夫なのか！？」

慌てた様子のコウに3人とも落ち着かせるように微笑んだ……つもりだ。実際は皆ニヤニヤと笑っていたかもしれない。

「ま、とりあえず落ち着いて。そんでコレ着て」

「…へ？」

いきなり渡された制服に、状況がつかめないコウは目を点にしている。

電話で一樹からは『トモヤが大変！！』と聞いたから、慌てて大した身支度もせずに走ってきたというのに……。しかもHRの真っ最中だったのに、いきなりの電話で教室を飛び出してきたせいでさっきから携帯には学校のヤツからばんばん電話がかかってきている。

なのに、この状況はなんなのだろう？

電話の声のような慌てた様子もないし、むしろニヤニヤとわらっている。

そこまで考えて、コウははっとして渡された制服を叩きつけた。

「もしかして…騙したのか…？」

すでにコウの瞳は怒りで燃え上がっている。それをみた秀秋は慌て

て弁解した。

「違うつて！！実際連れてかないとまじでヤバそうだし……」

「じゃあ早く連れてけよ！！」

秀秋の言葉を聞いて、コウの瞳は怒りの色から心配の色に変わる。

「だからコレ着ろつて！！」

「わかったよ！！」

土をはらつて渡された制服を再び受けとると、自分の着ていた制服を脱いで白シャツの上から学ランを着る。

「着替えたぞ！！」

「ハイハイ。じゃ、行きますか」

「コウが仲間になった。チャラッチャチャチャ」

「まだやってたのかよ！！！！」

制服を着替えさせたおかげで、コウが教師などに怪しまれることはなかった。おかげでなんの問題もなく、保健室前に到着。

コンコン、とドアをノックしてからドアを開ける。

以前はノックなどする性格なんかじゃなかったが、一度、魔女の着替えシーンに遭遇してから開ける勇氣はなくなった。

ガラッ——…

扉を開けた瞬間、俺たちは目を見張った。

そこにあっただのは…。

綺麗に整えられたベッドに横たわるトモヤ。

その顔にかぶせられた白い布。

涙を流してトモヤの手を弱々しく握る保健医。

「トモヤ……!!??」

涙のワケ

「トモヤ!？」

秀秋の呼び声が保健室に響く。

その声に保健医は暗い表情のままゆつくりと振り返った。今にも崩れ落ちてしまいそうな足取りで秀秋にすがり付いてくるその頬にはうつすらと涙の跡。

まさか…まさか…。

本当に俺のせいでトモヤが…？

「ヒデ君…酷いよ…」

涙声混じりの言葉に、ビクッ、と俺の体が震える。
ドクンドクン、と心臓の音が妙に大きく聞こえた。

「トモ…ヤ…？」

ちから抜けたようなコウの声に、俺は思わずうつつ向いた。

「こんな…こんな美形を目の前にして食べさせてくれないなんて、私には耐えられないっ…!!」

うわーん、と大人げなく声を上げて泣き出す保険医におれたちは皆、目を点にしていた。

「…へ？」

「あー……」

ワケが分からない、というような声をあげるコウに対して、コウ以外のその場にいた3人は納得したようにうなづく。一樹が代表して、トモヤの顔にかけられた白いハンカチを取る。

「その……つまり今の保険医の言葉を分かりやすく説明すると『こんな美形を見ていると思うはず手が出てしまいそうになるわ！でもヒデくんたちと約束しちゃったし……手を出したら二度と目の保養なんて出来なくなっちゃうし……。よし、こうなったら最期の手段よ！トモヤ君の顔にこれをかければ……ああ……！見えない！せっかくダイヤモンド並の原石が目の前にあるっていうのに見えないわ！……見たい……でも見たら手が勝手に……』ってな感じになるので」

「……………トモヤ……」

一樹の何とも分かりやすい説明に、コウはやっと安心したのか、トモヤの手を取り安堵の溜め息をついた。その瞳には微かに涙が見える。

「ところでヒデ君。こんな可愛い子、どこで捕まえてきたの？もしかして私へのご褒美かしら！？でもでも先生は……ご褒美ヒデ君でも……」

「なわけないでしょう」

ニッコリ爽やかスマイルで保険医を黙らせる。

「だよねえ…」

はあ、と重苦しい溜め息をつきながらも、さりげなく俺に抱きついてきてんの無意識だろうか？無意識でも許さないけどな。

とりあえず保険医の腕を引き剥がし、その腕をもってズルズルと引きずっていく。

「じゃ、コウ。頼んだからな」

「眠りの王子様、ちゃんと起こしたげてね」

「なんか知らんけど…頑張れコウ！」

「やゝん。せめてお姫様だっこがいいなあ、ヒデ君」

「えっ！？ちよつ、待っ——…」

ピシャリ

伸ばした腕も虚しく、4人はいそいそと保健室から出ていった。そしてコウはようやく理解…できるワケもなかった。が、今、自分がやるべきことだけは分かった。

「よし！」

とりあえず気合いをいれて、これからどうしようかと、トモヤをじっと見つめていた。

「うゝ…せつかくヒデ君たちと遊ぶチャンス…。こんな日に限って職員会議だなんて…」

「いや…別にチャンスってわけじゃ…」

4人はあの2人が終わるまで喫茶店で時間を潰そうと話していた。しかし、門を出ようとした瞬間、校内放送を知らせる鐘がなったのだ。

『香川先生。香川先生。今日は職員会議ですよ』

職員室の窓に目を向けてみれば、見たことのある顔が……いや正しくはメガネをかけたヤツがこちらを見ていた。

「アレって、お前の担任だよな？名前なんだっけ？」

たしかありきたりな名前だったハズだが、思い出せない。仕方なく空に尋ねてみるものの

「えゝ知らないよそんなの」と返される始末。

空は関心のないやつの名前を覚えるのをまったくも苦手としていた。秀秋自身も、今さっきの放送で初めて保険医の名前を知ったばかりで人のことは言えないが。

「田村よタ・ム・ラ！あいついつも私につっかってくるのよねゝ」

田村か。

やっぱりありきたりな名前だ。

嫌そうに保険医もとい香川は言う。

「はいはい。じゃ、センサーは職員会議に行ってください」

「え〜…」

「え〜、じゃない」

しぶしぶと保険医もとい香川は校舎に入っていく。その背中とはとてもなき寂しそうだ。

「パーティーは3人になった」

「ハマったのかよ…」

空は楽しそうに秀秋と一樹のあとをついてくる。なんでも、パーティーというものは整列が義務付けられているらしい。

そして喫茶店へと向かって歩いていると、空が何かの気配を察知したかのように俺の後ろに隠れる。

「ヤバイ…来る!…」

「なにが…」

まだコイツは勇者ごっこがしたいのか…と思っていたがどうやら違

うようだ。本気でなにかがやってきている気配を感じたらしい。
めずらしくその表情は緊張感が漂っていた。

「何がって、つか——」

「つかまえたっ！！！」

「ぐはあっ！！！」

空の言葉を遮り、地面を物凄い力で蹴って走ってきて、空を抱えながら物凄いスピードで遠ざかっていくのは我が妹、司だった。

「またスピードがあがったね、司ちゃん」

「……………」

とりあえず、喫茶店に行った。

そして待つこと数十分。

喫茶店に息を切らせながら入ってきたのはコウ。そしてそれを追い掛けるように入ってきたのはトモヤ。

コウは顔が真っ赤だったが、あの後、保健室でなにかあったのかは、二人は教えてくれなかった。

「実はさ〜」

「黙れっ！！！」

…トモやは教えたいようだった。

それぞれの想い

『空也…』

溜め息のように漏れた声。

その声は暗い夜闇に浸透する――…。

「俺ね、妹もいるんだ」

「妹？」

まるで自慢するかのように話す空の言葉にコウは耳を傾けていた。
一つ一つ、たわいもない話をする。

コウにとってそれはとても新鮮なものだった。
けれど、そんな想いと共に罪悪感が自分を責め続ける。

“空と普通の友達になりたい”

それもまた、遠くて儚い夢…。

「お前も我慢強いなー」

二人の会話を聞いていた秀秋はついそんなことを呟いた。

さつきから聞いていたが、明らかに一方的に話す空の話を聞いているコウに同情。よくまあ、コイツの話を長々と聞けるな…、と逆に感心する。

秀秋は自分なら絶対耐えきれないと思った。

「我慢？」

「ヒデ！！俺に対して失礼だぞ！！！」

怒ったように叫ぶ空。

その姿は本当に空也の生き映し。

なんで俺たちは、今になっても過去にしがみついて離れられないんだろう…。

最近――…

同じ夢ばかり見ている。

「俺の話、つまんない？」

ヒデ兄の言葉で少し不安になる。

もしかして、無理矢理コウに話しに付き合わせてしまっただろうか。

「ううん、おもしろいよ」

でもコウは俺の不安を一気に消し去った。

につこりと優しく微笑んで、違う話しも聞きたいな、とも言ってくれた。

「俺なら耐えらんねえ……」

「ヒデ兄！！！」

俺は叫ぶ。

なんでヒデはいつも意地悪なことしか俺に言わないんだ！！

そう思いながらも、結局許してしまうのは、やっぱり……好き、なんだと思う。

なんだかんだと、兄弟なんだし、嫌いにはなれない。

意地悪だけど、時には頼りになる。あくまでも時には……だ。

もちろん司も大好きだ。

妹のくせに俺に偉そうな態度とってムカつくこともあるけど、根は優しい。

二人ともかっこいいし可愛いしで、自慢できる兄妹だ。

けれど最近おもう。

俺たちは本当に兄弟なのか、と。

自分がなぜそんなことを思うのかも不思議だった――…。

遊びに行った日からコウはよく空と遊ぶようになった。
その光景を見ながら、いつもおもつのは…。

秀前がいない、と。

はたから見れば、俺が秀前の生まれ変わりなんだからいるように思えるんだけど。
いつも夢では、三人が楽しそうに話しているのを見ていたから…かな。

いない秀前をかわいそうだと思う自分がここにいるのだ。

「ヒデ兄ィ、トモとかイっちゃんとか誘ってボーリング行かない？」

「ボーリング？」

「そ。賭けしようぜ、賭け」

こんなにも自然な光景なのに…。

俺はただ三人が昔一緒に遊んでいたことを知っているだけなのに…。
俺の目には、その光景が不自然に思えて仕方がない。

「へー、勝つ自信あんの？」

「もちー!!」

そう言つて…いつも負かされているのはどのどいつだ。

秀秋は携帯を開き、二人をメールで呼び出した。

「現地集合でいいよな？」

「おっけーおっけー!!ほんじゃ、行こうぜ」

等身大の鏡を覗くと、俺の想い描いた世界がある。

無邪気に笑う空の横にいる。

あの日の面影を残したままの秀前の顔。

不自然でもなんでもない、ありのままの光景――。

ただ、秀前のかわりに俺がいるだけだ。

「ん?どうした、コウ」

いつも笑みを浮かべているコウの表情はどこか暗い感じがした。しかし、「何が?」と顔をあげて笑ったコウの表情には、すでにそんなもんは消え失せてしまっていた。

「なんでもないよ…」

いつもと変わらない笑みを浮かべて玄関へと走っていくコウの背中

を見て、俺は気にしないことに決めた。

「ちょっと何してんの？早く〜！！」

すでに靴を履いて準備万端の状態の空に急かされて、俺はサイフと携帯をポケットに突っ込んだ。

「そーいえば、妹いるって言ったじゃん」

「ん、ああ」

そういえばさっき、空がコウにそんなことを話していたっけ？

すでに空は玄関を飛び出していた。

姿のないことを確認するとコウは、再び口をひらく。

「それ、誰？」

「誰って…ツカサ」

「うつわ〜、言うと思ったよ！！んな、会った事もないヤツの名前
言っても俺が分かるわけないじゃん。前世は誰ってきいてんの！！」

…何か、今、すげー馬鹿にされた気がした。

つか、コイツ…俺と空に対する扱いチガクね？

「空也のおとーと。の、司魁」

「司魁！？うつわ〜…性格悪そ」

お前が言っな。

「てか司魁っていったら、俺らの司令塔だったヤツじゃん。お前の敵じゃん、敵」

「え……？」

それを聞いた途端…

ドクン、と大きく心臓がはねあがったかのように、頭に響いた。

頭に秀前の顔が浮かんで、消えたと思ったら。

俺の意識まで途切れた――…。

ブラック兄弟

「秀秋？」

「……………」

秀秋はうつ向いたまま、動かなくなってしまった。言葉もなにも発しないままの秀秋に不安を抱き、コウは下から顔を覗きこむかのように見る。

目は虚ろで、それは以前、秀前が表に出てきている状態に似ていた。その目には、光がない。

「そ、空っ！？」

身の危険を感じ、慌てるように空に助けを求めようと振り返るが、すでに空の姿はない。
一気に不安が恐怖に変わる。

「……………」

でも、これでいいのかも知れない。

俺は秀前が命よりも大切にしていた空の命を奪ったんだ。

憎まれて、当然だよな…。

腹をくくり、秀前とまっすぐ向き合う。

秀前は前に一步一步と踏み出してくる。

ゆっくりとだんだんコウに近付いてくる秀前には、なにか圧倒されるものがあって、コウは身動きをとることすらできない。

何ともいえないプレッシャーで、フローリングに足がひつついてしまったみたいだ。

秀前の手が、コウの頭に、触れた――…。

「なあゝに、ぼつとしてんだ？早く行かねえと空がまた煩いぜ？」

「……………」

くしゃくしゃと頭を撫でられたコウは、呆然と秀秋を見つめる。

それを不思議に思ってたか、きょとんとした顔で「どした？」と首を傾げる。

「ひ、秀秋？」

「あ？なんだよ」

秀秋はいつもと変わらぬ様子で眉をひそめる。コウは思わず、その場に座り込んでしまっていた。

「よ…よかったあ…」

「はあ？ワケわかんねえヤツ…」

コウはドキドキと早かった鼓動を落ち着かせて再び立ち上がる。それとほぼ同時に、玄関の扉が開かれてひょっこりと空が顔を出した。

その表情は実に不満そうだ。

「もーおそいよー！！トモたちも待ってんのに」

随分と待たせてしまったようで不機嫌な空。二人は急かされるままに慌てて靴をはいて家から出る。

ボーリング場へ着いてみると、予想通りにトモヤが眉をつり上げて腕くみをしながら待っていた。一樹はいつもと変わらぬ様子でジュースを飲んでいる。

「遅いつー！！！」

不機嫌なトモヤの第一声。

コウはそれをなだめる役割を押し付けられ、秀秋はひとり、受付へと向かっていった。

「あーっ！！ムカつく！！！」

ドカッと乱暴に座ったのは、コウでもなく秀秋でもなく、トモヤでもなければ一樹でもない、空だった。

「な〜にが『お母さんかお父さんは？』だよっ！！」

まだゲームもはじまっていけないというのに、空は随分とご立腹だった。

今まで中学生にならまだしも、小学生にまで間違われたことはなかったのだ。

しかし今回はボーリングだという理由で無邪気にニコニコしながらスキップをしていたせいなのか、スタッフに間違われてしまったのだ。

精神年齢はそのくらいじゃないかと、コウは思った。

「精神年齢はそんなもんだろ」

キツ、と鋭い目付きがこちらに向けられてコウはビクツと体を震わせる。

いつものほわつとしたイメージの空ではなく、前世、空也の近付く的なオーラが放出されていた。

俺じゃない、と両手をあげて自己主張。

一歩身を引いて、少し空から距離をとる。すると、軽い衝撃が背中に伝わった。

どうやら、先程のセリフは秀秋が言ったものらしい。その証拠に空の視線は秀秋に向けられていた。

「お前に言われたくねえよ、でくのぼうが」

「おーおー、久々にブラックじゃねえか。誰が木偶の坊だ、ああ？漢字で書けるようになってからそういう言葉は使っんだな。このミ

ジンコ」

空だけではなく、秀秋までもがブラックモードに入っている。
コウはそんな二人に挟まれて身動きを取れない状態になっていた。

「はあ…、司ちゃんがないと駄目だねえ。この兄弟は」

一樹が苦笑いを漏らす。

トモヤまで「同感だ」とうなずいている。

「とりあえず、言い争いはそこまでにしようか？ここまで来て、まだ俺らを待たす気？」

一樹がコウを助けるように二人の間に入って、なだめる。

「まったくだ。お前らは何のためにココに来てるんだよ」

ニヤリと笑ったトモヤは、レーンを指さす。

つまり、勝負ならボーリングで。と言いたいわけだ。

「上等」

「はっ、空くんなんか俺様に勝てるのかな？」

「そついうの、負けた時辛いからあまり言わない方が身のためだよ」

「ありえないから」

「ナルシー…」

「フェミニスト」

「大人げない」

「そのせりふ、自分の精神年齢の低さ認めてるとしか聞こえねー」

二人はリレーのように相手を罵りながらボールを投げる。そのボールはものすごいスピードで弧を描いて、見事にピンを倒していった。

「あの二人…互いをピンに重ねてみてんのかな…」

コウは恐ろしいものでも見ているかのように、呟く。

結局、その日のゲームは、二人ともパーフェクトゲームを成し、引き分けにおわったのだった――。

本当の敵

「じゃーな、トモヤ一樹」

「バイバーイ！」

「本当に送らなくても平気か？」

あっさりと別れをつけて既に帰路についている一樹と比べて、トモヤは心配そうにコウに声をかけていた。

「大丈夫だよ。俺だって男だし、空の部屋に忘れ物してるから取りに行かなきゃだし」

「そっか…。じゃ、気を付けて帰れよ」

コウは笑顔でそれに応えると、トモヤは複雑そうに微笑して一樹のあとをおっていった。

それをしばらくみたあとに、3人も帰路についた。

「……」

「……」

「……」

……き、気まずい……。

三人は横に並んで歩いていた。

コウを挟むようにして歩く二人の間には微妙な空気が漂っていて、居心地の悪さに溜め息をつく。

それに気付いた秀秋は、割り切ったかのように沈黙を破った。

「おい、空。まだ怒ってんのか？小さいのは体だけじゃなくて心もか？」

「ちよつ、ヒデ！何挑発してんだよ！」

素直に謝るかと思いきや、秀秋の口から発せられたのは、先程までのものと何ら変わらないからかいセリフだった。コウは内心ハラハラしながら二人を交互にみくらべていたが、意外にも、ニヤニヤと笑みを浮かべている秀秋とは違って空は落ち着いた様子だ。

いつもなら、秀秋の挑発にも馬鹿みたいにのるというのに……今日の空は何かおかしい。

朝は普通だったのに、いつからこんなふうになってしまっていたんだろう。

突然、少し前を歩いていた空がピタリと足を止め、振り返る。

その視線はじつと秀秋に向けられていた。

「空……？どうしたんだよ」

俺は心配になって、思わず空に駆け寄る。

今の空は、いつもとは違う。

いつもの空なら、こんな目で秀秋を見たりしない。

こんな冷たい、まるでそこらの石でも眺めているような無感動な表情を秀秋に向けることはないんだ…。

「怒ったのか？ ひねくれたのか？ やっぱ餓鬼だな」

「秀秋…？」

今気付いたけど、秀秋も何か違う。

空みたいに、これが変…みたいなハッキリとしたものはないけれど、いつもの秀秋とは違っていた。

秀秋は気付いていないんだろうか…。

空の異変に――。

「別に怒ってないし、ひねくれてもないよ」

ふう、と呆れたような溜め息が空から聞こえた。

「だったら何だよ。なにそんなピリピリしてるわけ？」

しばらく二人は互いを見つめあい、無言のままだった。

そしてその沈黙を破ったのは――空。

「俺はただ、ヒデを返してくれればそれでいい。ピリピリ…はしてるのかな？ ヒデになりすましているアンタにはちょっとイライラしてるからね」

コウはわけもわからず、空を見つめる。

何を言っているのか分からなかった。

空はまるで今ここに居る秀秋が、本当の秀秋ではないみたいな発言をした。

冷たい口調で、空は秀秋に尋ねる。

「アンタ…誰？」

「……」

秀秋は驚いたように固まったまま。なにも言わないままだ。
空はそんな秀秋を気にした様子もなく、言葉を続ける。

「ずっと秀秋らしく振る舞ってたみたいけど…俺たちは兄弟だよ？
しかも只の兄弟じゃなくて三つ子。気付かないわけないじゃん。
まあ司なら一瞬で分かっちゃうんだろうけど…」

俺は途中で気付いた、と話す空に、コウは絶句。
頭の中は完璧こんがらがっていた。

「……………」

秀秋は肯定も否定もしない。
ただ黙って、空を見つめていた。

「で…アンタ誰？」

コウは秀秋を見つめる。

こいつが秀秋じゃないとしたらこいつは誰かって…？

そんなの、一人しかない。

秀秋になりすませるやつなんて、アイツ以外いるわけがない。

「しゅ…ぜん…？」

信じられないけど、空がここまで言い切るなら目の前の人物は本当に秀秋ではないのだろう。

そう思ったとき、頭に真っ先に浮かんできたのは昔の懐かしい友の姿。

もう、友とは思ってくれていないだろう…アイツの優しい笑み。

「本当に…秀前、なのか…？」

信じられない気持ちでいっぱいのまま、相手の答えをまつ。

しばらくすると、突然そいつはニッコリとした笑みを見せた。

「ハハ…さすが空。あの頃と全然変わってない…」

「あの頃…?」

秀秋…いや、秀前の言葉に空が反応する。

秀前は以前となんら変わらない優しい笑みを浮かべて、空を見つめていた。

これは…秀前だ。

あの頃の秀前のままだ。

「秀前っ！…!」

気が付けば俺は勢いよく、秀前に飛び付いて抱きついていて自然と目頭が熱くなり、涙が流れそうになるのを必死に堪える。

今なら謝ることが出来るかも知れない。

許されることはないけど、ちゃんと謝りたい。

「ゴメン…ごめんなさい!!俺、あの時…っ」

堪えていた涙が溢れて、秀前の胸元を濡らす。

殴られること、罵られることを覚悟して秀前にしがみつく。

ちゃんと謝りたいって思っていた――。

だって…小さいころ、悪いことをしたら謝るのが礼儀だ、と教えてくれたのは秀前なのだから…。

俺は悪いことをした。

だから謝る。

ごめんなさいと頭を下げる。

でも許してほしいなんて言わない。思わない。

それくらい、俺はすごく『悪いこと』をしたのだから…。

「顔をあげて？コウ…」

頬に、秀前の手が優しく触れる。俺は抵抗することもなく、その泣き顔を秀前にさらした。

秀前は笑っていた。

まるであの頃みたいにな、じゃあ俺たちを見守っていた時のような優しい笑みで…。

「秀前…」

「いいんだよ、コウ。君は悪くない。そもそもあれは戦争だったんだ。殺らなきゃ殺られる。そんな時代だったんだよ…」

ギュツ、と抱き締められて、俺は微かに聞こえる鼓動で安心しきっていた。

でも秀前の言葉に耳を傾けながら、俺はまた涙を流してしまっていた。

「どうして…」

あの惨劇が、時代のせいだとわかったお前が…なんでまだこんなところにいるんだ。

どうしてまだそんなに悲しそうな笑みを浮かべているんだよ…。なんでまだ時代に縛られているんだ。

秀前はニツコリと微笑む。

「コウは悪くないよ。すべてを仕組んだのは司魁なんだから」

「……え」

「全部思い出した。あの戦争を仕掛けてきたのは…司魁だ」

空也の想い 【番外編】（前書き）

本編の続きではありません

空也の想い 【番外編】

俺はずっと心に決めていたことがあった。

それは、もう二度と叶うことはない儚い夢だった――…。

血に染まった俺たちの最期の戦場。

結果的には味方軍の圧勝…とまではいかないが、とにかく兵士数倍以上の敵軍に屈することなく勝利をおさめたのは紛れもない事実。けれど、今回の戦いで俺の夢は儚く散ったのだ――…。

気が付けば、戦場全体を見渡せるほどのところに俺はいた。

――下には無数の屍。

――鼻をつくほどの血の臭い。

自分が死んだと気づくには、そう時間はかからなかった。

でも、夢なんだろうかとも思った。

いつも見ていた、悪い夢…。

きつと目を覚ませば隣に秀前がいて、優しく微笑む。

『おはよう、空也。また悪い夢でも見たのか？』

心配そうな秀前の顔が鮮明に頭の中に浮かんでくる。

唯一、俺が甘えることを許される優しい秀前。

『秀前がいなくなる夢…。すげえ恐かった』

真面目に言ったのに、秀前は一瞬驚いたように目を丸くして、スイツチでも入ったかのように大声で笑い出すだろう。俺は怒ったように頬を膨らませるんだ。

そしたら秀前は『ごめん、ごめん』と言いながらも笑っていて、ようやく笑いを堪えると、俺よりも大きい暖かい手でそっと俺の頭部に触れる。

『大丈夫。俺は空也のそばにずっといるよ』

それはいつも俺が悩んでいる時、困っている時に俺に秀前がくれたいた優しい言葉。

馬鹿な秀前。

俺がどんな気持ちでお前と一緒にいたかなんて全然分かっていないだろ？

「ホントに…馬鹿だよ…」

呟いた言葉と一緒に、瞳から透明な雫がこぼれる。

しかし、形のない涙は地中に届くこともなく、幻影として空中で消えてしまう。

涙が消えたその真下には、大きな岩。

所々に無数の傷と生々しい血痕。

その岩にもたれるように寄り添う二人。

それは小さな俺の体を抱き締めるように永久の眠りについてしまった秀前だった。

腹部にはさし傷のような大きな傷を負っていた…。

すでに血はかわいている。

しかし、頬にはまだ新しい涙のあとのようなものがあつた。

『ゴメン、空也……ごめんな…』

それは先ほどまで唯一戦場に響いていた声。か細く、かすれて、風の吹き抜ける音にさえかき消されてしまいそうな小さな声。

秀前は最期の力が尽きてしまうまで、すでに力のない空也を抱き締めて、ただ“ごめん”と呟いていた。

そんな声を空也はちゃんと聞いていた。

胸が苦しくなった。

無意識に流した涙は止まらなかった。

馬鹿秀前…。

お前が謝ることなんてなに一つないのに…。

あの時——…

『秀前!!』

危ないお前を見て、俺は腕を伸ばすことしかできなかった。助けに行くこともできなかった。

むしろ、俺の声でお前の注意をそらさせてしまった…。

アレは明らかに俺の失態だ。

ごめんな…、秀前。

俺って本当にかっこつかないよな。助けようとしたのに、自分が刺されるなんてさ…。

秀前が馬鹿だとしたら俺はただの大馬鹿者だ。

あるとき、ちゃんと避けることができていたら、あんな顔…させなくともすんだのに……。

今だに頭に焼き付いて離れない…。

絶望に歪んだ悲しみの表情。

おかげで秀前の笑った顔も思い出せやしない。

——なあ、秀前…。

笑ってよ。

俺、お前の笑った顔…

大好きなんだ――…。

空に浮かぶ光が、また一つ微笑んで消えた…。

ありがとう

「え…司魁？」

なぜ？と聞こうとしたが、俺はすぐに口を閉ざした。秀前の表情はいつの間にやらもの悲しげなものに変わっていた。

「ごめんな、空。せつかくの休日秀と過ごせなくしちゃって」

「だったらなんで？なんでこんなことしたのか分かんないと納得できねえよ」

空の返答は早かった。

わけの分らない話を目の前でされたあげく、大した説明もされずに頭は混乱してしまっているのだろう。いや、空の場合…すねているのか？

秀前はそんな空に空也の面影を重ねて優しく微笑んだ。

「別に？ただ、今の君と遊びたかったただだよ」

「なんで…」

コウはつい口を挟んでしまっていた。秀前の言葉にものすごく深い意味が隠されているような気がして、胸が締め付けられるかのよう

に苦しい。

“ただ、今の君と遊びたかったただだよ…”

ひとり…過去にその身を縛り付けられて見ていることしかできなか

つたその想いは？

取り残されてしまう気持ちは？

きつと今の自分には理解できない深い悲しみなのだろうとコウは悟る。

「…分からない？コウ、君なら分かるよね？」

「あ……」

秀前の優しい微笑みで、こうは少し前のことを思い出していた。初めて、トモヤから秀秋たちの話を聞いたとき…なつかしくて、会いたくなつた。また昔のような関係のまま、遊べたらいいな…と思つていた。だからトモヤに頼んで遊ぶ機会をつくつてもらつたのだ。でも、実際に会つた秀秋たちは昔とは全くの別人で、秀前の性格とは違つていて少し落ち込んだ。

でも、やっぱり秀秋たちといふのは楽しいと思つている自分がいて…。

秀前もそうだったのかな？

昔の關係に戻ることを期待、
していたのかな……？

「一緒だよ、コウ」

「え？」

うつ向いていたコウが顔をあげると、そこには先程と何ら変わらぬ優しい顔付きの秀前がいて、つい昔に戻ったかのような錯覚に捕われた。

きつと、そうだったんだ…。

秀前も望んでいたんだ。

あの頃のような、幸せな時間を――…。

でも、同じなわけがなくて、最愛の空也は秀前のことは覚えていない…。

「だから…あのときはつい暴走しちゃって…」

あはは、と空に笑いかける秀前。どうやら、前に何かあったらしい。その証拠に笑みを向けられた空は、顔を真っ赤にして怒っていた。

「あれはお前かぁー！！！！！！」

ちやぶ台が目の前にあれば、茶碗が乗っていようがなんだろうが引っくり返してしまいそうな勢いで空は叫んだ。秀前はそれを見て、楽しそうに微笑んでいるばかりだった。

「んにやろうつ！！！！」

ブン、と風を切る音をならして空の拳が秀前に的を絞る。しかし、秀前はそれを簡単に避けてしまい空の怒りは募る一方で。

そのあとも、コウでは絶対についていけなさそうなスピードで秀前に向かっていく空。でもそれが当たることはなかった。

「あ、あれは、ほらっ！！自我を忘れていて俺自身どうしようもなかったというか…」

「うるさい！！！！」

空はもう、そんなことを気にしているわけではなかった。ただ単に、自分の攻撃を易々と避ける秀前を見ていると悔しくて、無我夢中に拳を振るう。

「ちよっ、そんなムキにならなくても…」

「なつてねえっ!!」

なつてるじゃないか…という秀前の呟いた言葉さえも空の耳には届かず、耐えまなく攻撃が繰り返されてくるのを見て、秀前はキリがないと判断したのかヒラリと身軽に体を翻し、空の後方へ一瞬にして回ると空の腕を掴んだ。

「っっ!! 離せっ!!」

「ちよっと落ち着いてよ空也。俺は別に喧嘩をしにきたわけじゃないんだから」

かなり参っているのか、その表情は昔の空也の悪戯に困り果てている時の顔だった。

「今日は楽しかったよ。久々にゴンゼも見れたし…」

「……………」

そう言う秀前の言葉に、俺は複雑な気持ちになっていた。なんで皆トモヤがゴンゼだと分かるんだ？

「だから、ね？空…」

——今日はサヨナラだ。

そう小さく空の耳元で呟き、秀前の瞳が閉ざされる。
ふっ、と腕から力が抜けたのか空の捕まっていた腕も解放され、コ
ウはただ秀前か秀秋かも分からぬままその人物を見つめていた。

「…あれ？」

なんとも気の抜けたようなその声は昔の秀前を思い出させた。
コウと空は互いの顔を見合わせ、コクリと頷くと声をかけてみる。

「どうした？ヒデ」

「——…る…」

「へ？」

小さく口を動かしたことだけは確認できたが、その声はあまりに小
さく聞き取ることができない。

しかし、秀秋は今度はハッキリとその言葉を発した。

「記憶が…ある」

ただ呆然と、信じられないとでもいうような表情で秀秋はそう呟い
た。

死のビジョン

「はい、では質問します」

空は楽しそうな声で言った。

そこは昨日と同じ秀秋の家のリビング。俺たち3人はいつもの定位置に座り、お茶をすすりながら正座。

「昨日は誰とどこに行きましたか？」

「昨日、俺とお前ら二人が部屋にいて、トモとイツキを呼び出してボーリングに行った」

「ふむ…」

空はなるほど、と顔をしかめうなづく。そして次の質問。

「昨日俺に何を言いましたか？」

「チビ、ミジンコ、器が小さい…エトセトラ」

「反省してますか？」

「俺が言ったわけではないのでしてません」

最もな意見だが、そのセリフは空に笑みを浮かばせた。

「デスマッチしたいですか？」

「してます!!!」

手をビシッとあげてハッキリキツパリ断言した秀秋は少し笑えたが、俺はそれを押し殺す。でなきゃ、火の粉がこちらにまで飛んでくることだろう。

「よろしい」

今度は満足げに頷く空。それを見て、秀秋は心底安堵した様子だった。

「んじゃ、全てを語ってもらおうかな」

「かくかくしかじか」

「そんなん通用するのは漫画の中だけだよ!!」

確かに。

それで通じあえたらどれだけ楽なんだろうか。

とりあえず、俺も秀秋に協力して全てを空に説明したのだった。

――…。

「なるほどねえ」

話せることは全てを話し、俺と秀秋は溜め息をついた。過去のことを説明すんのもって簡単なことではないと実感した。

でも、今の話だけで納得してしまう空はすごいと正直思う。

ていうか、なるほどで納得出来るものなのか？
俺には絶対出来ねえ…。

「確かに」

「!？」

「信じろと言われて信じられるもんじゃないけど、実際に見ちゃったからねえ」

心を詠んだように話す空。それを俺と秀秋は静かに見守る。
でも、みんな考えていることは同じだった。

(((面倒くせえ…)))

「とりあえず…なんで今回に限って記憶があるかが一番気になるな」

秀秋は正座していた足を崩すと、ベッドに座りなおす。そして足を組み、考えこむように腕を組んだ。

これは考え事をするときの秀秋のクセのようなものだ。幼い頃から
の夢のせいかな、現実世界でもすっかり定着してしまったのだ。

「そつだね…」

コウは小さく呟き、秀秋同様考え込む。しかし、空だけは考えているというよりも、何かを思い出そうと眉間に皺を寄せていた。しばらくその表情は続き、そして突然何かを思い出したのか、バツと顔を上げる。

「今日、空也つてヤツの命日なんじゃないの？そんで秀前の邪悪なオーラが消えたとか！！」

自信満々、といった感じの空を、秀秋は容赦なく切り捨てた。

「空也の命日ならとくに過ぎたよ。秀前より先に死んだんだぞ？」

日付としては、秀前も空也も変わらないが、どちらにしろ命日はとくに過ぎていた。

あの夢を見てから…いったい何日があったらうと秀秋は指折りで数えてみる。すると、意外な言葉が空から発せられた。

「それって…俺と司が鍋パーティーした日じゃない？」

「そうだけど…ってなんで知ってんだよ！？」

秀秋は驚いてついつい大きな声で叫んでしまう。コウも驚いたらしく、その視線はじつと空を捕えていた。

「やっぱり…」

空の意味深な言葉に、秀秋は不安そうな表情になる。まさか…空にも記憶があるのか？

それだけは御免だった。

なにが悲しくて実の弟と、過去にいちやついていた記憶を共有しなければならぬのだ。

「俺…その日に夢見たんだよ。なんか、夢のくせに細かいし、変だな」とは思ってたんだけど…」

「……………」

空也はあのかとき……死んで、なかった…？

ふ、と浮かんだその考えを、秀秋は頭を振ってそれを消し去る。

死んでなかったなんて、有り得ない。あのか時、確かに空也は死んでいた。

冷たくなっていた。

殺されていた。

それは、背中から深々と突き刺さった槍が物語っていたのだ。

小さい体はとても軽くて、大怪我していた秀前の力でさえ支えきれなかった。

「死んで…なかった？」

「いや、死んでたよ」

否定したその声は、コウのものだった。

「ねえ、空。その夢、おかしかったんでしょ？まるで、自分がテレビでも見てるような感覚じゃなかった？」

「…うん、そんな感じ」

「やっぱりね」

コウは何かを知っているんだろうか？

遠回し的なそんなセリフに、俺は首を傾げるばかりだ。

「それはね、空也が生きているときの記憶じゃない」

——死んだ後の、記憶だよ…。

死のビジョン（後書き）

メインを仕上げるためしばらく更新おやすみですm——（
m

忘れた記憶

「死んだあとの…記憶？」

正直、なんじゃそらって感じだった。死んだのなら思い出も記憶もないだろう。それなのに死んだ後？

あのあと…秀前が死んだあと、あの時代はどうなったのだろうか。眉間に皺を寄せて、秀秋は悶々と考え込む。そんな秀秋を見てコウは苦笑い混じりに言った。

「俺にもよく分かんないけど、それほど空也の思いが強かったんじゃないかな。ほら…空也って…その、秀前とアレだったし」

「アレ？」

「いや、お前は知らなくていいぞ。空」

「なんでだよっ！！隠しごとなんてずるいぞっ」

わめく空は放っておき、秀秋はふと秀前の夢を思い出した。

そういえば秀前は俺と変わる直前に司魁が本当の犯人だとかなんとか言っていた。どうすればその結論に行き着くのか、それが全然分からない。司魁の生まれ変わりは司で、でも当然司に記憶はないわけ。それを確かめるすべもない。

本当に…本当に司魁が犯人だったとするならば秀前は一体どうする気なんだろう。司魁は空の弟で、秀前ともあんなに仲が良かった。それなのに、恨むことなんてできるのだろうか。

分らない、と一度首を振る。

昔のヤツが何を考えているかなんて現代に生きる俺には分らない。でも、もしも秀前が本気で司に復讐をしようとしているのなら、俺は止めなくてはならない。

「秀秋、おい、ヒデ？大丈夫か？」

「っ…、ああ。ちょっと考え事」

「考え事ね…。とりあえずそれは後にして空の話を聞こうぜ。どんな夢だったのか、ちよつと気になる」

「いい提案だが、空に聞いてもあまり理解できないと思うぞ？コイツ馬鹿だから」

「馬鹿ってなんだよ！！夢の話するだけだろっ、楽勝だって！！」

「お前：長年兄弟やってきて俺はお前のする説明をかつて一度たりともちゃんと理解できた覚えはないぞ」

空に言語力は皆無だ。

日本人なのだから英語は必要ないとテスト前に豪語しているわりには、日本語だってまともに出来ていない。空の言っ言葉をちゃんと理解できるのは空と秀秋の片割れ、司だけだった。

「じゃ、はなしてみろ」

「なんかフワフワ浮いてて、知らねえ城にいた」

「ほらな」

「まだ終わってねえだろ！！」

出だしの時点でわけわかんねえっつの…。

「城で、火が燃えてて、けらい？みたいなヤツが殿様…じゃなかったみたいけど誰かを逃がそうとして、でもそいつがけらいだけ残して、けらいが泣いてた」

「…終りか」

「うん」

「…俺だってお前の片割れだ。なんとなくで理解してやるよ」

「…い、意味が分からない」

「なにをーっ！？ちゃんと話しただろっ」

呆然としているコウに説明をするべく、なんとなくで理解した秀秋は身振り手振りで説明しはじめた。

「つまりは…えーと、空也は霊体になったとして、その体でどこかの城に向かったんだよ。火が燃えてるってことはきつと相手の…つまりはお前の味方の城だ。そこで家来と誰かが逃げようとしていたのに、結局その誰かは城に残り…死んだ。きつと家来だけは助けようとそいつだけ逃がしたんだろ」

「けらいはそいつのこと司魁様って呼んでたぞ」

「そう司魁が…って、司魁っ!？」

「お、おう…」

突然大声を上げた秀秋にビビり、空の体はビクリとはねた。思わぬ名前に秀秋は頭をかかえる。

「ああ、でもそうか。殿様…ね。コウの上司は司魁だったから当然か」

ということは、司魁は自ら…命を断ったというわけか。負けたから？兄を殺してしまったから？潔く死を受け入れた？

昔は、負ければ、規則に違反すれば自害が当たり前だったということは知識として知っていたにも関わらず、自分の前世に係のあるものがそれを行っていたかと思うと、ズキリと秀秋は心を痛める。

司魁は、一体どんな思いで死んだのか。

なぜか痛む心に、秀秋の眉は自然と皺をつくる。

「…秀秋、思い込むなよ。なにもお前がわるいわけじゃないんだから」

「そうだぞヒデー!! だいたい実の兄に歯向かうなんてとんでもないヤツだな」

「……司魁はなんで、秀前と空也の敵になったんだろっな」

そうぼつりと漏らした言葉に、答えるものはいなかった。

分らないのだ、それだけがどうしても。遠い昔、一体司魁は何を思っ実の兄の敵に回ったのか。

あんなに仲が良かったことを知っている秀秋なら、なおさらのこと

だ
っ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8566c/>

永久の想い

2010年10月28日08時09分発行